

# 新歳時記通信

第6号

2012年6月



Hubble Floating Free (2002)

マイブランドの俳句	1
ツイッター的俳句論	3
季題の数	6
主要歳時記一覧	10
二十四節気と新暦	17
グレゴリオ暦の一月一日	23
日本版二十四節気	33
各地の春夏秋冬	46
春夏秋冬の傍題 (検証編)	55
春夏秋冬の傍題 (例句編)	71
後記	79

〔「連衆」第61号「巻頭言」を加筆修正して転載〕

## マイブランドの俳句

現代俳句協会青年部発行の『In Situ』創刊号（二〇〇一年十二月刊）に「特集『俳句以後』の世界」が掲載されている。しかし、「俳句の終わり」や「俳句以後」を云々する前に、まずクリアすべき次のフレーズがある。

この作品の存在に先んじて命名されたに等しい俳句形式は、いったい俳句そのものに本当にめぐりあったことがあるのであろうか。

俳句の吊鐘を撞くと言ったのは、たしか石田波郷であったと思うが、もしも厳密な観点に立つならば、遂に一句も誕生しなかったに等しい幻の俳句のために、誰であろうと吊鐘を撞くことなど出来ないのである。

おそらく、これが、俳句形式における前衛にして正統の大略であろう。（高柳重信「俳句形式における前衛と正統」『現代俳句の軌跡』）

子規は「発句は文学なり、連俳は文学に非ず」（『芭蕉雑談』『増補再版獺祭書屋俳話』）と言ひ、「俳諧の発句」をつづめて「俳句」と言った（『俳』の字）『虚子俳話』つゝもりであった。

しかし、連俳を否定した時点で発句は消滅し、俳諧から独立した時点で発句は発句ではなくなる。「俳句イコール発句」という現在常識とされる概念は本来何の意味もなさない。

子規の実際になしたことで、そして最大の功績は五七五を基調とする短詩の形式を、集団で行う座の文芸から切り離し、それとは全く別の新しい個人の文学として誕生させ、出発させたことである。

俳句は俳句である前に（表現行為）のひとつにしか過ぎません。そして文学における前提とは実は個々の書き手の中にしか存在しません。（谷口慎也『取舍』—そこから見えてくるもの—「連衆」第六十号）

俳諧や発句、子規や虚子、そういう既存の前提とは一切係わりのない、各個の前提を新たに構築することからは始まる。それは、重信の言う発句もどきでも俳句もどきでもない、子規ブランドでも虚子ブランドでもない、真にマイブランドの俳句を構築することである。

次はその一例、昭和二十八年十月、金子明彦、林田紀音夫、堀葦男の三人で同人誌「十七音詩」を立ち上げた時のものである。

本誌創刊の趣旨は、これを一言にいえば俳句を十七音詩として把握することにより新しい俳句の誕生を念願するにある。中世的文学理念のつき纏う俳と季の束

縛を断ち切っても、なおそこに俳句の骨格を形成する特性は失われず、むしろそれによってこそ現代民衆の詩精神を盛るに相応しい新しい俳句の誕生が可能であると確信するにある。(「題言」「十七音詩」創刊号) 宇井十間は「かたちあるものはすべて壊れることが俳句の世界にいるとなぜか見えなくなる。」(「俳句の終わり」[Jin Shin] 創刊号)と言った。

しかし、「俳句の世界」という名の既成俳壇の外にいて、それが「見えている」あるいは「見えていた」俳人は沢山いる。先の高柳重信、谷口慎也、金子明彦、林田紀音夫、堀葦男、そして、その最なる者は芭蕉ではなかったか。

芭蕉は、その生活と芸術とが示しているように、「古人の跡をもとめず、古人の求たる所をもとめ」て、一生開展し続けた。開展し続けるという事は、換言すれば、絶えず新しい立場を獲得するという事である。又換言すれば、絶えず出来て来る筈の新しい自分の型を更に自分で打ち砕いて進んで行くという事である。更に換言すれば、古びを払い落として新しい味を一日日新にして又日日新なる世界を創造しつつ生活するとう事である。芭蕉は「古人の求たる所」のものを不易と名づけた。そうして、それを「もとめ」て日日新にして又日日新なる世界を創造しつつ生活する事を、芭蕉は流行と名づけた。即ち芭蕉は、不易を載せて(厳密に言えば、不易を求めて)流行する事を、芸術の第

一義と信じたのである。(小宮豊隆「不易流行説に就いて」『芭蕉の研究』)

即ち、芭蕉は、宇井流に言えば「不断に壊して行くこと、それこそが俳句(俳諧)である。」と言ったのである。

芭蕉は「俳諧の終わり」とも「俳諧以後」とも決して言わなかった。それは、「俳諧」という「芸術」が芭蕉一人のものでないこと、壊すのは「自分の内なるもの」であることを、芭蕉は熟知していたからである。

芭蕉は「世にはいかい三合ほか出ず、七合は残りたり」(森川許六『歴代滑稽伝』)とも言っている。芭蕉にとって、俳諧の終わりや俳諧以後を言う前に、残りの七合きわを究めることの方が先であった。

誰に何と言われようと、自分の作りたい事を自分の思うように作ることにしている。時流におもねらず唯吾ひとり道の道を歩くのみである。吾が作りしもの皆これ俳句なりと決めてかかっている。「天街」の諸氏よ、願わくばこの身勝手ですばらな左右のお尻をひっぱたいて俳句地獄の砂をなめつつせしめよ。(藤後左右「俳歴」『熊襲ソング』)

この「左右の叫び」もまた、マイブランドの俳句の典型である。自分の尻をひっぱたいて貰ってでも「俳句地獄の砂をなめつづけ」ようと覚悟した左右の耳に「俳句の終わり」や「俳句以後」という言葉がどのように響くかは、言うまでもないであろう。

## ツイッター的俳句論

アメリカの Twitter 社が提供する今はやりのオンラインサービス「ツイッター」は、日本では「つぶやき」と訳されているが、本来は「さえざり、おしやべり、くすくす笑い」(『ランダムハウス英和大辞典』)の意である。

ここでは「子規の俳句革新」について、各人に「ツイート」をしていただく。発言の多くはこれまでの論に紹介したものである。なお、ツイートの一記事は百四十文字以内とされているが、その制限は特に設けないものとする。

正岡子規。発句ほつぐは文学なり、連俳れんばいは文学に非ず。(＊  
1)

高浜虚子。小説其他あらゆる詩篇と同じく連句も亦た宇宙の現象の美的描写なのだ、唯小説等は縦断的即ち縦に因果の糸を辿るに反して連句は横断的即ち横に各種の現象の切口を各別に観察するに違いがある許りだ。(＊2)

正岡子規。俳句ということばはあし(私)が違ちがいはじめたのだが、お前も知っておいでる通り、「俳諧の発句」をつづめて言ったのだ。(＊3)

尾形尙。近世の後期に入って、季語の数は飛躍的な増大をとげた。そうした動向が、発句の独立化(つまり発句が連句の座を離れ単独で詠作される機会が多くなったこと)や、俳諧の普及と大衆化の趨勢すうせきに伴うものであったことはいうまでもない。(＊4)

前田霧人。俳句が「俳諧の発句」でしかないなら、子規の行ったことは単に近世後期の趨勢を踏襲したものに過ぎない。そうであれば、発句以外の俳諧を切り捨ててしまつた弊の方が大きいであろう。子規の本当の功績は、俳句を集団で行う座の文芸から切り離し、それとは全く別の新しい個人の文学として誕生させ、出発させたことにある。

宇多喜代子。いかなる協会に所属していようと、いかに楽しい仲間との句作の時間があるうとも、自作は個室での営為です。(＊5)

前田霧人。句会や吟行のあることなどを以て、未だに俳句を「座の文芸」とする人が多いが、それが誤りであることを、この言葉は如実に示している。

暉峻康隆。四季にこだわらず雑の歌を詠んできた王朝以来の和歌はもとより、中世以来の連歌・俳諧は、百韻・歌仙の半数近くを雑の場として、本来、有季と無季が相半ばしている人生をグローバルに歌うという、万葉のいにしえから十一世紀にわたる日本独特の短詩形文芸は、まことに素晴らしい。この共同体の制約の多い連句を「文芸に非ず」と称して退け、連句初発の「発句」を個人的プレーの「俳

句」と改めたのは正岡子規であった。(＊6)

橋間石。個我的潔癖な主張を求め続ける俳句は瘦せ細るほかなかるう。時代思潮として止むを得ぬ推移かも知れぬが、母郷忘離の代償は廉くないのである。(＊7)

前田霧人。かつて親自身がそうであったように、子供は何れ親の元を離れて行く。俳句が発句に止まっっているなら「瘦せ細る」ほかないが、五七五を基調とする短詩の形式はそんな柔なものではない。尻尾を切られた蜥蜴から直ぐに尻尾が生えるように、俳句は発句以外の要素を補填し、更には新たなものを獲得して、不断に進化して行く。

頼原退蔵。付句は名の如く付句であるから、勿論独立に創作される筈はない。けれどもその鑑賞が一句として独立になされる事は常であった。『三河小町』に伝える所によれば、芭蕉は付句が付肌を重んずべきは勿論だが、しかしよい付句は前句を聞かなくとも、それだけですでによい句であると言ったという。そして同書にはそうしたよい付句を選んで、前句無しに掲げて居るのである。(＊8)

太田白雪。付肌はさるものにて 先おもしろき句は 前不聞とも句ひにをしはからるゝや 翁の詞也(＊9)

高浜虚子。俳句というのを子規の命名の意に反し、俳句という文字が現す広義の意味に解し、発句はもとより俳諧の長短の平句(発句でない句)全部を含むものとし、無季の句はもとより十四字の句も亦独立して可なりと思っておる。(＊10)

仁平勝。虚子は俳句を詠む題材を季節の現象に限定したりはしない。季題さえ入っていれば題材は何を詠んでもいい。それが季題の方法であり、即ち「花鳥諷詠の文学」の定義に他ならない。わたしなりに補足するなら、季題がなければ作ればいいのである。俳句の近代化にあたって、虚子のもっとも大きな功績は、五七五という定型のなかで発句の格を解体したことだ。(＊11)

高柳重信。おそらく、このときの虚子は、真に主観を尊重した独創を重んずる俳句の実践は、いわば少数の傑出した俳人たちにのみ可能であり、その他の凡庸な俳人たちは、たちまち月並俳句の低俗な観念世界に逆戻りしてしまうばかりであることを、逸早く見抜いていたのであろう。だが、このような考え方を、それに基づく行動は、少なくとも前衛的な精神から遙かに遠いものであった。(＊12)

暉峻康隆。虚子の「俳句の目的は花鳥風月を諷詠するにあると思います」という昭和二年宣言によって「雑」の場はほとんど無視され、「季題のないのは俳句ではない」という視野狭窄の有季定型が主流となった。しかしこれによって、ポエジーの有無にかかわらず歳時記を頼りに、誰でも俳人になれる大衆化時代が到来した。(＊6)

高柳重信。現代の俳壇は、一斉に発句への回帰を行なっているようである。もはや誰も、まだ見ぬ俳句などにあこがれる者はいないのである。いまや、誰も彼もが、はじめから発句を目指していたかのように、しきりに発句につい

て語りつづけている。彼等は、発句こそが俳句であったと主張し、発句ではない俳句を目指した人たちを愚かな慮外者として非難し、遂には乱心者として俳壇から隔離しようとするに至った。（\*12）

某。先生、百年の後には吾々の俳句はいつたいどうなるでしょうか。

高浜虚子。再びもとの月並に返りますね。（\*13）

宇井十間。「俳句」よりも、「俳句以後」<sup>かえ</sup>を考えたいほうがいい。なぜなら「俳句」はもう「ニワトリ」だとわかっているから。巨視的に見ると、俳句は歴史化されつつあるというのがたしかかなような気がします。（\*14）

谷口慎也。様式は形式をその原型とします。形式は〈空〉です。様式とはそれに〈因縁〉をつけたものです。

「俳句は減びる」とか「すでに減びている」というような声をよく聞きます。それこそ何と大仰なと思うのですが、それは多分、ひとつの俳句様式が減んだということを言っているのでしょう。（俳句という）形式は〈空〉でありますから減びようがありません。形式は無限の可能性を秘めて、間口を広げて私たちを待っています。そしてそれとの〈因縁〉の結び方は個々人、全くの自由です。（\*15）

### 参考文献

\*1 正岡子規「芭蕉雑談」、『増補再版頼祭書屋俳話』

\*2 高浜虚子「連句の趣味」、「ほとゝぎす」明治三十二年五月号

\*3 高浜虚子『俳』の字（子規との問答）、「虚子俳話」

\*4 尾形仂「序」、『近世後期歳時記十三種本文集成並びに総合索引』

\*5 宇多喜代子「余滴茫々―いまという時に」、現代俳句（二〇〇六年五月号）

\*6 暉峻桐雨（康隆）「近世の無季俳句―短詩形文芸における「雑」の意義」、「Series 俳句世界3 無季俳句の遠心力」

\*7 橋間石「八」、『俳諧余談』

\*8 頼原退蔵「季の問題」、『俳句周辺』

\*9 太田白雪「三河小町」、『新修・太田白雪集』

\*10 高浜虚子他「座談会」、「ホトトギス」昭和十一年三月号、高浜虚子『俳談』（岩波文庫）所収（「俳句という語」）

\*11 仁平勝「虚子の読み方」

\*12 高柳重信「俳句形式における前衛と正統」、「現代俳句の軌跡」

\*13 赤星水竹居『虚子俳話録』（講談社学術文庫）

\*14 宇井十間「俳句の終わり」、「In Situ」創刊号

\*15 谷口慎也「俳句とは何か―その形式と様式―」、「連衆」第五十三号、二〇〇九年七月

## 季題の数

これから現時点で最新の大歳時記『角川俳句大歳時記』をベースに、時候の部から順次、季題の考察に着手する。

そのためには、まず歳時記の季題の数がどれくらいあるかを知って置く必要がある。

表1は主な歳時記の季題数（見出し季題）、表2は『角川俳句大歳時記』、表3は現代俳句協会編『現代俳句歳時記』の季題数の詳細である。

近世歳時記では、芭蕉の時代の『増山井』の季題数が一三八五、近世末期の『増補改正俳諧歳時記葉草』が『増山井』の約二・五倍の三四二七である。

近現代歳時記では、改造社版『俳諧歳時記』が四八三〇で、『増補改正俳諧歳時記葉草』の更に四割増の季題数となる。一方、その翌年に出た虚子編『新歳時記』は二四六〇で、改造社版『俳諧歳時記』の約半分の季題数である。

また、『角川俳句大歳時記』の季題数は五二六九で、改造社版『俳諧歳時記』の更に一割増となっている。

その部別の内訳は「時候」が五％、「天文」が六％、「地理」が三％、「生活」が三四％、「行事」が一四％、

「動物」が一二％、「植物」が一六％である。

「生活」と「行事」を合わせた所謂「人事」が全体の約半分、「植物」が全体の四分の一を占める。

また、これを「基本季題五〇〇」に限ると、「時候」が一二％、「天文」が一三％、「地理」が六％と割合が約二倍に増加、「生活」は二一％、「行事」は五％と割合が激減、「動物」は一六％、「植物」は二七％と割合の変化が少ない。

即ち、「時候」、「天文」、「地理」は基本的に重要な季題が多く、「生活」、「行事」は比較的瑣末な季題が多いことを示している。勿論、季題の重要度と、それをういた俳句の出来具合とはまた別の問題である。

一方、金子兜太が主導する無季の題を掲載した一連の歳時記の集大成である現代俳句協会編『現代俳句歳時記』の季題数は、有季題が一八〇九、無季題が三八七である。

有季題の部別の内訳が『角川俳句大歳時記』の「基本季題五〇〇」にやや近いこと、無季題の内訳で「人間」、「生活」がそれぞれ約三割を占めるのが興味深い。

齋藤慎爾他編『必携季語秀句用字用例辞典』収録の季題数が二三〇〇〇、一般語が四二〇〇〇、計六五〇〇〇で、最新の『岩波国語辞典（第七版）』の収録語数と同じ、『角川俳句大歳時記』の見出し季題、傍題を合わせた全季題数が一八四九七である。現在の季題数がどの程度のものであるか、これでおおよその見当が付くであろう。

表 1 主な歳時記の季題数（見出し季題）

書名	刊稿年	西暦年	春季題	夏季題	秋季題	冬季題	新年季題	季題合計
誹諧初学抄	寛永一八	一六四一	一五三	一八八	一四七	一一一		五九九
はなひ草	正保四	一六四七	一九六	一七七	一六〇	一一六		六四九
山之井	慶安元	一六四八	三〇九	一八五	三五〇	一八八		一〇三二
増山井	寛文七	一六六七	四一七	三五三	三六四	二五一		一三八五
滑稽雑談	正徳三	一七一三	六三〇	五五四	四〇九	二四六		一八三九
華実年浪草	天明三	一七八三	八〇六	六五九	八二八	四七五		二七六八
俳諧歳時記	享和三	一八〇三	七二〇	六七四	七六七	四四〇		二六〇一
増補改正俳諧歳時記葉草	嘉永四	一八五一	九七八	八三二	一〇三四	五八三		三四二七
俳諧歳時記（改造社）	昭和八	一九三三	八六三	一三八七	九六三	七八九	八二八	四八三〇
虚子編新歳時記（初版）	昭和九	一九三四	五一五	七六五	五二六	六五四		二四六〇
山本健吉編最新俳句歳時記	昭和四六	一九七一	八四二	一二五八	八一二	七三六	二五八	三九〇六
現代歳時記（成星出版）	平成九	一九九七	四一四	五六五	三九九	四三八	一一七	一九三三
現代俳句協会編現代俳句歳時記	平成一六	二〇〇四	四二六	五八八	三八七	四〇八		一八〇九
角川俳句大歳時記	平成一八	二〇〇六	一〇九八	一五九二	一一三六	九一二	五三一	五二六九
合本俳句歳時記（第四版）	平成二〇	二〇〇八	五七六	七二三	五〇九	五〇六	二二三	二五三七
日本の歳時記（小学館）	平成二四	二〇一二	五九八	七九六	六〇三	六一四	二二七	二八三八

\*本表は「西瓜考」（「新歳時記通信」第二号）の「表2」に加筆修正して作成した。

\*空欄の新年季題数は、近世歳時記は春季題、近現代歳時記は冬季題に含まれる。





表3 現代俳句協会編『現代俳句歳時記』の季題数

無季題								有季題												
計	植 物	動 物	文 化	生 活	人 間	地 理	天 文	部	合 計	磅 題	計	通 季	植 物	動 物	行 事	生 活	地 理	天 文	時 候	部 /季
三八七	一二	三一	五六	一四六	九三	二四	二五	見出し語	一三六〇	九三四	四二六	一一	一五八	五九	三三	五三	二三	四〇	四九	春
一一八七	一五	四二	一六二	三九五	三八九	七八	一〇六	磅 題	一七〇二	一一一四	五八八	二〇	二一九	一二三	三〇	一〇九	一八	三一	三八	夏
一五七四	二七	七三	二一八	五四一	四八二	一〇二	一三一	計	一三一八	九三一	三八七	一〇	一六三	五四	三六	三三	一一	三八	四二	秋
一〇〇	二	五	一四	三四	三一	六	八	%	一二八九	八八一	四〇八	一八	七五	六二	五三	七四	二一	四六	五九	冬 (新年)
									五六六九	三八六〇	一八〇九	五九	六一五	二九八	一五二	二六九	七三	一五五	一八八	計
											一〇〇	三	三四	一七	八	一五	四	九	一〇	%

## 主要歳時記一覧

これまでに参照した歳時記の一覧を以下に示す。他にも沢山の歳時記があるのは勿論のことである。

表 1 近世歳時記

書名	分類	編著者等	刊稿年	西暦年	翻刻文献	影印文献
連歌至宝抄 匠材集	連歌論書 連歌辞書	紹巴著 紹巴跋	天正一四成 慶長二跋	一五八六 一五九七	* 3 * 4	* 1
無言抄	連歌式目書	応其著	慶長八頃刊	一六〇三	* 4	* 1
はなひ草	俳諧作法書	立圃編	寛永一三自奥	一六三六	* 5	* 1
誹諧初学抄	俳論書	徳元著	寛永一八自跋	一六四一	* 5	* 1
毛吹草	俳諧撰集・辞書	重頼編	正保二刊	一六四五	* 6	* 1
山之井	俳諧式目書	貞徳著	正保四成	一六四七	* 7	* 1
俳諧御傘	俳諧式目書	季吟著	慶安四刊	一六五一	* 8・* 1	
増山井	季寄	季吟著	寛文七刊	一六六七	* 5	* 1
俳諧無言抄	俳諧作法書	梅翁著	延宝二刊	一六七四	* 1抄出	
増補はなひ草	俳諧作法書	不詳	延宝六刊	一六七八	* 8	
日本歳時記	歳時記	具原益軒刪補	貞享五刊	一六八八	* 9・* 10	
誹諧番匠童	俳諧作法書・季寄	和及著	元禄二刊	一六八九		* 1
誹諧をだまき	俳諧作法書	竹亭著	元禄四刊	一六九一		* 1

俳諧大成新式	俳諧作法書	驚水編	元禄一刊	一六九八			* 1
滑稽雑談	季寄	其諺著	正徳三序	一七一三	* 11		
通俗志	俳諧作法書	員九(胤及)著	享保二序	一七一七			* 1
俳諧古今抄	俳諧作法書	志考編著	享保一四自序	一七二九	* 12		* 1
其傘	俳諧作法書	貞山著	元文三自序	一七三八	* 13		
改式大成清鈔	俳諧辭書	不角著	延享二以前刊	一七四五			* 2
俳諧手挑灯集	俳諧作法書・句集	貞山著	延享二跋	一七四五			* 2
篋纏輪	俳諧作法書	千梅著	宝曆三自奥	一七五三			* 2
俳諧糸切齒	俳論書	石橋著	宝曆一二自跋	一七六二			* 2
俳諧四季部類	季寄	二柳著	安永九刊	一七八〇			* 2
俳諧名知折	季寄	素外編	安永九刊	一七八〇			* 2
俳諧歯がため	俳論書	素外著	天明三自序	一七八三			* 2
華実年浪草	季寄	龜文著	天明三刊	一七八三			* 2
俳諧小笠	季寄	八悟著	寛政六刊	一七九四			* 2
俳諧歳時記	歳時記	曲亭馬琴編	享和元序	一八〇一			* 2
俳諧新季寄	季寄	奇淵著	享和二序	一八〇二			
俳諧季寄大全	季寄	不二庵(二柳)序	享和二序	一八〇二			
改正月令博物筌	季寄	洞齋著	文化五刊	一八〇八	* 14		
季引席用集	俳諧辭書	存義遺稿	文政元序	一八一八			* 2
季寄新題集	季寄	千艸園著	嘉永元刊	一八四八			* 2
増補改正俳諧歳時記葉草	歳時記	藍亭青藍編	嘉永四刊	一八五一	* 15		

近世歳時記参考文献

- \* 1 『近世前期歳時記十三種本文集成並びに総合索引』尾形仿・小林祥次郎共編、一九八一年、勉誠社
  - \* 2 『近世後期歳時記十三種本文集成並びに総合索引』尾形仿・小林祥次郎共編、一九八四年、勉誠社
  - \* 3 『連歌論集・下』伊地知鉄男編、一九五六、岩波文庫
  - \* 4 『無言抄・匠材集』正宗敦夫編纂校訂、日本古典全集、一九三六年、日本古典全集刊行会
  - \* 5 『貞門俳諧集二』小高敏郎・森川昭・乾裕幸校注、古典俳文学大系2、一九七一年、集英社
  - \* 6 『毛吹草』新村出校閲・竹内若校訂、一九四三年、岩波文庫
  - \* 7 『貞門俳諧集・下巻』勝峯晋風編著、普及版俳書大系14、一九二九年、春秋社
  - \* 8 『蕉門俳諧続集・下巻』勝峯晋風編著、普及版俳書大系8、一九二八年、春秋社
  - \* 9 『日本歳時記』貝原益軒刪補・貝原好古編録、生活の古典双書1、一九七二年、八坂書房
  - \* 10 『益軒全集1』貝原益軒著、益軒会編、一九七三年、国書刊行会
  - \* 11 『滑稽雑談』四時堂其諺著、一九七八年、ゆまに書房
  - \* 12 『俳諧註釈集・下巻』佐々醒雪・巖谷小波校訂、俳諧叢書2、一九一三年、博文館
  - \* 13 『亨保俳諧集』鈴木勝忠・白石悌三校注、古典俳文学大系11、一九七六年、集英社
  - \* 14 『詩歌連俳季寄註解改正月令博物筌』鳥飼洞齋著、一九〇七年、求光閣書店
  - \* 15 『増補俳諧歳時記栞草・上下』曲亭馬琴編、藍亭青藍補、堀切実校注、二〇〇〇年、岩波文庫
  - \* 16 『俳文学大辞典』加藤楸邨・大谷篤藏・井本農一監修、一九九五年、角川書店
  - \* 17 『俳句講座6 俳書解説篇』一九三二年、改造社
  - \* 18 『季語の研究』井本農一著、一九八一年、古川書房
- (表1の書名始めデータ全般は\*16、『増補はなひ草』のデータは\*18による。)

表 2 近現代歳時記（表 3 に結社歳時記、表 4 に地方及び海外歳時記を別掲）

書名	発行	刊行年	西暦年	備考
新歳事記	實文館	明治三六	一九〇三	大江濤敵編。
俳句新歳事記	大学館	明治三七	一九〇四	寒川鼠骨著。
歳事記例句選	内外出版協会	明治四〇	一九〇七	寒川鼠骨編。例句に重点を置いた歳時記。
俳諧例句新撰歳事記	博文館	明治四一	一九〇八	今井玉三郎（柏浦）編。
新修歳時記	俳書堂	明治四二	一九〇九	中谷無涯編。
俳句資料新撰歳時記	国文館書店	明治四五	一九一二	田山白人著。
新撰袖珍俳句季寄せ	靱山書店	大正三	一九一四	俳書堂（靱山仁三郎）編。
写生を目的とする季寄せ	ホトトギス	大正八	一九一九	ホトトギス発行所編集部編。一月号綴込付録。
懸葵季寄せ	懸葵発行所	大正一二	一九二三	沼法量編。
新校俳諧歳事記	修省堂	大正一四	一九二五	今井柏浦編。
詳解例句纂修歳事記	修省堂	大正一五	一九二六	今井柏浦編。『俳諧例句新撰歳事記』の改訂版。
昭和新修大成歳時記	星文閣	昭和二	一九二七	宮田戊子著。
最新俳句歳事記	平凡社	昭和五	一九三〇	小泉汪外著。
現代俳句季語解	交蘭社	昭和七	一九三二	水原秋桜子編。
昭和大成新修歳時記	交蘭社	昭和八	一九三三	宮田戊子著。『昭和新修大成歳時記』の改訂版。
俳諧歳時記	改造社	昭和八	一九三三	高浜虚子・青木月斗・松瀬青々・大谷句仏編。
新歳時記	三省堂	昭和九	一九三四	高浜虚子編。
新修俳諧歳時記	前田書店	昭和九	一九三四	小島伊豆海著。
新選俳句季語解	交蘭社	昭和一三	一九三八	水原秋桜子編。『現代俳句季語解』の改訂版。
新歳時記・改訂版	三省堂	昭和一五	一九四〇	高浜虚子編。

季寄せ	三省堂	昭和一五	一九四〇	高浜虚子編。昭和三九年・改訂版。
俳諧歳時記	新潮文庫	昭和二五	一九五〇	新潮社編。昭和四三年・新改訂版。
新編歳時記	大泉書店	昭和二六	一九五一	水原秋桜子編。昭和三二年・改訂版。
新歳時記・増訂版	三省堂	昭和二六	一九五一	高浜虚子編。
季語集	大泉書店	昭和三〇	一九五五	水原秋桜子編。
俳句歳時記	角川書店	昭和三一	一九五六	角川書店編。
新俳句歳時記	光文社	昭和三一	一九五六	山本健吉編。
俳句歳時記	平凡社	昭和三四	一九五九	富安風生編集代表。
現代俳句歳時記	番町書房	昭和三八	一九六三	石田波郷編。
図説俳句大歳時記	角川書店	昭和三九	一九六四	角川書店編。
最新俳句歳時記	文藝春秋	昭和四六	一九七一	山本健吉編。
季寄せ	文藝春秋	昭和四八	一九七三	山本健吉編。
現代俳句歳時記	実業之日本社	昭和四八	一九七三	中村汀女監修。平成一五年・新装版。
合本俳句歳時記新版	角川書店	昭和四九	一九七四	角川書店編。
新編季語集	大泉書店	昭和四九	一九七四	水原秋桜子編。
風生編歳時記新版	東京美術	昭和五一	一九七六	富安風生編。昭和四六年・初版。
新撰俳句歳時記	明治書院	昭和五一	一九七六	大野林火・皆吉爽雨・平畑静塔・安住敦他編。
入門俳句歳時記	大陸書房	昭和五二	一九七七	志摩芳次郎編。
最新俳句歳時記	文春文庫	昭和五二	一九七七	山本健吉編。
現代俳句歳時記	大泉書店	昭和五三	一九七八	水原秋桜子編。『新編歳時記』の改訂版。
新編俳句歳時記	講談社	昭和五三	一九七八	鷹羽狩行・草間時彦・清崎敏郎・野澤節子他編。
カラゝ図説日本大歳時記	講談社	昭和五六	一九八一	水原秋桜子・加藤楸邨・山本健吉監修。
基本季語五〇〇選	講談社	昭和六一	一九八六	山本健吉著。平成元年・講談社学術文庫。

ホトトギス新歳時記	三省堂	昭和六一	一九八六	稲畑汀子編。平成二二年・第三版。
俳句小歳時記	大泉書店	昭和六二	一九八七	水原秋桜子編。秋桜子没後の刊。
作句歳時記	講談社	昭和六三	一九八八	楠本憲吉編著。
新歳時記	河出文庫	平成元	一九八九	平井照敏編。平成八年・改訂版。
現代俳句歳時記	千曲秀版社	平成元	一九八九	金子兜太編。平成八年・改訂版。
俳句歳時記	講談社文庫	平成七	一九九五	水原秋桜子編。『現代俳句歳時記』の文庫化。
合本俳句歳時記第三版	角川書店	平成九	一九九七	角川書店編。
現代歳時記	成星出版	平成九	一九九七	金子兜太・黒田杏子・夏石番矢編。
合本現代俳句歳時記	角川春樹事務所	平成一〇	一九九八	角川春樹編。
草木花歳時記	朝日新聞社	平成一〇	一九九八	金子兜太・川崎展宏・稲畑汀子・飴山實監修。
カラー版新日本大歳時記	講談社	平成一一	一九九九	飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修。
現代俳句歳時記	現代俳句協会	平成一一	一九九九	現代俳句歳時記編纂委員会編。
日本を楽しむ暮らしの歳時記	平凡社	平成一二	二〇〇〇	季語解説・榎本好宏。「別冊太陽」。
新版・俳句歳時記	雄山閣	平成一三	二〇〇一	桂信子・金子兜太他編。平成二一年・第三版。
季寄せ	NHK出版	平成一三	二〇〇一	平井照敏編。
現代俳句歳時記	学習研究社	平成一六	二〇〇四	現代俳句協会編。
ザ・俳句歳時記	第三書館	平成一八	二〇〇六	有馬朗人・金子兜太・廣瀬直人監修。
角川俳句大歳時記	角川学芸出版	平成一八	二〇〇六	角川学芸出版編。
合本俳句歳時記第四版	角川学芸出版	平成二〇	二〇〇八	角川学芸出版編。
ザ・俳句十万人歳時記	第三書館	平成二〇	二〇〇八	松田ひろむ編。
日本の歳時記	小学館	平成二四	二〇一二	宇多喜代子・片山由美子・長谷川權他編。

(刊行が複数年にわたるものは、初年度を刊行年として記載)



表3 結社歳時記

書名	発行	刊行年	西暦年	備考
雪解俳句歳時記	東京出版	昭和五二	一九七七	皆吉爽雨編。
天狼俳句歳時記	本阿弥書店	昭和五九	一九八四	山口誓子監修。
草田男季寄せ	萬緑発行所	昭和六〇	一九八五	萬緑運営委員会編。
山暦俳句歳時記	邑書林	平成一一	一九九九	青柳志解樹監修。
馬酔木季語集	ふらんす堂	平成一三	二〇〇一	水原春郎編。
続氷室歳時記	邑書林	平成一九	二〇〇七	氷室同人会編。

表4 地方及び海外歳時記

書名	発行	刊行年	西暦年	備考
ふるさと大歳時記	角川書店	平成三	一九九一	山本健吉監修。全七冊+別巻『世界大歳時記』。
札幌歳時記	札幌市	昭和五九	一九八四	札幌市教育委員会文化資料室編。
北ぐに歳時記	北海道新聞社	昭和五九	一九八四	永田耕一郎著。北海道の歳時記。
満州歳時記	博文館	昭和一一	一九四三	金丸精哉著。
沖繩俳句歳時記	琉球新報社	昭和五四	一九七九	小熊一人著。
沖繩・奄美南島俳句歳時記	瀬底月城	平成七	一九九五	瀬底月城著。
荊楚歳時記	平凡社東洋文庫	昭和五三	一九七八	宋懐著。
台湾俳句歳時記	言叢社	平成一五	二〇〇三	黄靈芝著。
ブラジル季寄せ	日伯毎日新聞社	昭和五六	一九八一	梶本北民編。
ブラジル歳時記	佐藤牛童子	平成一八	二〇〇六	佐藤牛童子編著。編集協力・日毎叢書企画出版。

(刊行が複数年にわたるものは、初年度を刊行年として記載)

## 二十四節氣と新暦

季節を表す「春」、「夏」、「秋」、「冬」は歳時記において、各季節の時候の部の最初にある代表的な季節である。また、その季節区分は季節の軸を第一義として構成される現行の歳時記の根幹をなすものであり、現行の歳時記に記載されている主な季節区分の方法は次の三つである。

### ① 東洋の天文学的季節区分（二十四節氣）

立春から立夏の前日、おおよそ二月から四月までを春とする、等々。

### ② 気象学的季節区分

三月から五月までを春とする、等々。

### ③ 西洋の天文学的季節区分

春分から夏至の前日までを春とする、等々。

このうち、①は明治六年（一八七三）一月一日からの改暦以前、旧暦の太陰太陽暦の時代の歳時記に採用されていたものを新暦に準用したものである。

即ち、二十四節氣を季節区分に用いることは同じであるが、旧暦では平均で立春（新暦の二月四日頃）にあった年初が新暦の一月一日となり、その日取が約三十五日、ほぼ

一カ月早まったことに合わせて、旧暦では一月から三月までを春とする、等々であったものが、新暦では二月から四月までを春とする、等々となったものである。

現行のほとんどの歳時記は基本的に①②③の三つの季節区分の方法を記載した上で、①を季節区分として行い、②③を問題配列を行っている。

しかし、これら季節区分の歳時記解説には往々にして問題点があり、それが一人歩きをして、歳時記の成り立ちにまで影響していることがある。

また、従来の①ではなく②を季節区分に採用した現代俳句協会編『現代俳句歳時記』の刊行（二〇〇四年）に加えて、昨年（二〇一一年）からは日本気象協会が主導する「日本版二十四節氣」策定の動きが始まっている。

したがって、これから時候の部の季題を考察して行くのに先だって、二十四節氣と歳時記との係わりについて、次の三点を中心に改めて考察してみることとする。

（1）二十四節氣の新暦における位置付け

（2）グレゴリオ暦の一月一日の意味

（3）「日本版二十四節氣」の検証

まず本稿では（1）について考察し、続く「グレゴリオ暦の一月一日」で（2）、「日本版二十四節氣」で（3）について考察することとする。

### 一 現行の太陽暦（新暦）と季節区分

季節区分の歳時記解説において、前項の③のみを天文学的季節区分として挙げるものが多いが、二十四節気による①もまた、西洋の③と並ぶ東洋の代表的な天文学的季節区分である。これがまず第一の問題点である。

また、次の問題点は「現行の太陽暦（新暦）では、②で季節区分を行っている。」とする一部の代表的な歳時記や暦解説書の記述であり、新暦に準拠する歳時記とは②を季節区分として採用することであるかのように記載するものである。初版刊行年順に挙げると、次の通りである。

春、現行の太陽暦（新暦）では、三月から五月までをさす。（岡田芳朗・阿久根末忠『現代こよみ読み解き事典』、一九九三年）

現行の太陽暦に基づいて月並割で季節区分を行った。三月から五月までを春とした。（現代俳句協会『現代俳句歳時記』「序にかえて」、二〇〇四年）

現行の太陽暦（陽暦）では、三月・四月・五月までを春としている。（『角川俳句大歳時記』「春」、二〇〇六年）

太陽暦はたしかに季節とのずれは生じないが、別の問題を抱えている。それは暑い時期を夏、寒い時期を冬、その間が春と秋というふうに大ざっぱに考え勝ちなのである。そうすると、春は三月から五月、（略）、冬は十二月から二月ということになる。（長谷川權

『日本人の暦』「はじめに」、二〇一〇年）

明治六年から突如実施された太陽暦の普及にあたっては、欧米の季節をそのまま踏襲して、三月・四月・五月を春、（略）、十二月・一月・二月を冬とした。

（岡田芳朗「暦と季節の基礎知識―太陽暦（旧暦）と太陽暦（新暦）の季節感」『日本の歳時記別冊・俳句への扉』、二〇一二年）

そもそも、現行の太陽暦（新暦）に固有の唯一無二の季節区分などというものは存在しない。これらの歳時記や暦解説書が挙げる②だけでなく、先の①③の全てが現行の太陽暦（新暦）に基づく季節区分である。

また、厳密な意味での太陽暦に基づく季節区分とは、むしろ②ではなく、①と③の天文学的季節区分の方である。長谷川權『日本人の暦』に「大ざっぱに考え勝ち」とあるのは、正しくは太陽暦だからではない。②が次項に述べるような社会通念上、慣習的、便宜的に定義されている気象学的な季節区分だからである。

それでは何故このような誤解が生じたのか。先に挙げた五書の記述内容と執筆者、時系列などから推察すると、その鍵を握るのは、著名な暦学者で「暦の会」会長の岡田芳朗である。

岡田が書くような「太陽暦の普及にあたっては、欧米の季節をそのまま踏襲」した事実が本当にあったのか。また、あったとすれば、その根拠となる文献は何か。

まず、「暦の会」の会員で暦法研究家の須賀隆のサイト「Suchowan's Homepage」の掲示板に質問を入れてみた所、今度の「暦の会」例会で岡田会長に会うので聞いてみるとの回答をいただいた。

その結果、先のことを裏付ける文献は「直接には福沢諭吉『改暦弁』である由。当時の啓蒙書にはよくある記述だそうです。西洋に遡って典拠を確認してはいないようでした。」とのことであった。

福沢諭吉『改暦弁』は明治六年（一八七三）一月一日刊の慶應義塾蔵版で、当時の代表的な改暦の啓蒙書として一大ベストセラーとなったものであり、文献\*4、5などにその全文が掲載されている。

三月四月五月を春とし、六月七月八月を夏とし、九月十月十一月を秋とし、十二月一月二月を冬とするなり。（福沢諭吉『改暦弁』）

ここ（福沢諭吉『改暦弁』、筆者注）に記された四季の区分は、イギリスやアメリカのそれをそのまま転載したものであるが、新暦時代の新しい季分けになったことを思うと、重要な意味を持つものとなる。

（岡田芳朗『明治改暦―「時」の文明開化』）

次項に述べるように、福沢諭吉が英米のそれをそのまま転載したものであるという四季の区分は、現在の西洋で気象学的な季節区分となっているものである。そして、それは現在の日本で気象庁ホームページの「時に関する用

語」欄に明記される、気象学的に決定されている季節区分でもある。

即ち、岡田の言う「ここに記された四季の区分は新暦時代の新しい季分けになったこと」とは、現在の日本で気象学的に決定されている季節区分を指すことに他ならない。

しかし、次項に詳述するように、それは先の長谷川の書の所で述べた「慣習的、便宜的に定義されている社会通念上の季節の分け方」であり、西洋においても東洋においても、厳密な意味での太陽暦に基づく季節区分ではない。また、現行の太陽暦（新暦）に固有の唯一無二の季節区分でもない。

そして、そうした正しい認識に立った上で、それが現行の太陽暦（新暦）に基づく歳時記の季節区分として適切であるかが、改めて問題となるのである。

## 二 季節区分

なるべく簡潔平易に述べるには、『オックスフォード天文学辞典』の「季節」の項に記載された内容から始めるのが良さそうである。文中の「地軸」とは南極と北極を結ぶ地球の自転軸、括弧内は解説図に付された注記である。

一年を四分割した各期間。すなわち、春、夏、秋、および冬。これらの季節は地軸が傾いているために、緯度が異なる地点では地球が太陽を公転する一年の間

に受ける太陽光の量が違って来ることから生じる。

天文学的にいうと、季節は分点（春分および秋分）と至点（夏至および冬至）に始まるとされる。

（夏至のとき北極は太陽の方向に最大限傾斜している。北半球が最大量の日光を、南半球は最少量の日光を受ける。六カ月後の冬至のときは状況が逆になる。中間の春分と秋分のとき北半球と南半球は等量の日光を受ける。）

気象学者は季節を三暦月ずつのグループと見なしている。北半球では春は三月、四月と五月、等々。南半球では季節は逆になり、南半球の秋は北半球の春に対応する、等々である。（『オックスフォード天文学辞典』「季節」）

このように、新暦の三月から五月までを春、等々とするものは西洋、東洋（温帯）に共通の気象学的な季節区分である。日本では気象庁ホームページの「時に関する用語」欄にも明記される「慣習的、便宜的に定義されている社会通念上の季節の分け方」（平凡社版『気象の事典』、『なるほど！お天気学―天気検定公式テキスト』）であり、厳密な意味での暦に基づく季節区分ではない。

何故なら、暦とは「日月星辰の運行を測算して歳時、時令などを日を追って記した記録」（『日本大百科全書』）であり、季節の変化は月や星でなく太陽の運行により生じる。即ち、厳密な意味での暦に基づく季節区分とは「太陽の運

行の測算」に基づく天文学的な季節区分に他ならない。

表1 西洋の天文学的季節区分

季節	始点	新暦の日取	黄経
春	春分	三月二一日頃	〇度
夏	夏至	六月二一日頃	九〇度
秋	秋分	九月二三日頃	一八〇度
冬	冬至	一二月二二日頃	二七〇度

表2 中国の天文学的季節区分

季節	始点	新暦の日取	黄経
春	立春	二月 四日頃	三一五度
夏	立夏	五月 五日頃	四五度
秋	立秋	八月 七日頃	一三五度
冬	立冬	十一月 七日頃	二二五度

まず西洋の天文学的季節区分は、先の『オックスフォード天文学辞典』にあるように、分点（春分及び秋分）と至点（夏至及び冬至）を合わせた二至二分を季節の始まりとする（表1）。

表中にある黄経とは、太陽が見掛け上で地球を一年の間に一周三六〇度移動する位置を、春分の時を〇度として角度で表したものである。

一方、中国の天文学的季節区分は、二至二分を季節の始

まりではなく季節の中央に置き、二至二分の中間点を立春、立夏、立秋、立冬（四立）と呼んで、それぞれ春、夏、秋、冬の始まりとする（表2）。

そして、この二至二分と四立を合わせた「八節」をそれぞれ更に三分したものが二十四節気であり、太陰太陽暦である中国暦の暦日と季節の関係が変動して生じるずれを解消し、季節を調節して行く指標として用いられた。

即ち、二十四節気は「太陰太陽暦」の「太陽暦」の部分を受け持つ役割を果たすものであり、「太陽暦」に移行した後も、中国や日本に定着する代表的な季節区分として、その価値は何ら変わることはないのである。

### 三 新暦と旧暦

明治六年（一八七三）一月一日に始まる、中国暦に由来する太陰太陽暦の天保暦（旧暦）から太陽暦のグレゴリオ暦（新暦）への改暦は、歳時記にも大きな衝撃を与えた。

しかし、それは歴法的に太陰太陽暦が太陽暦に替わったことに根本の因があるのではない。旧暦では平均で立春（新暦の二月四日頃）にあった年初が新暦の一月一日となり、その日取が約三十五日、ほぼ一カ月早まったことが最大の要因である。

例えば、もし立春を年初とする太陽暦が新暦として採用されていれば、毎月の十五日が満月とは限らないなど、日

付と月の満ち欠けとの相違による多少の違和感などは生じたとしても、それ程の大きな混乱はなかったであろう。

明治の改暦に当たっては、当時京都兵学所御用掛であった市川齋宮が立春を年初とし二十四節気を用いた東洋的な太陽暦案「曆法議案」（明治二年、一八六九）を提出したが、採用されなかった。欧米列強に伍して行くためには、単に太陽暦にするだけでなく、日付まで含めて欧米の暦と一致しないと意味がないからである。

暦の年初は太陰太陽暦でも太陽暦でも様々な決め方が可能で、各国、各時代で様々の歴史がある。

中国の太陰太陽暦では、古代王朝の周では冬至の頃を正月（周正）、その前の殷ではそれより一カ月遅い月を正月（殷正）、その前の夏では更に一カ月遅い立春の頃を正月（夏正）としていたとする「三正」論が中国戦国時代に唱えられた。

戦国各国は、中国最古の伝説的な王朝である夏の後継は自国であるとの正当性を示すため、主として夏正を採用したとされ、漢の太初暦で夏正が採用されてから後、立春に近い頃を正月とする夏正が定着して行った。

こうした伝統の中で、中国で唱えられた太陽暦もまた二十四節気を用いたものとなる。宗の時代に沈括が『補筆談』の中で唱えた太陽暦「十二気暦」の年初は立春、それを継承した明末・清初の游子六が『天経或問』で提案した太陽暦「天暦」の年初は冬至、清朝の時代に反乱を起こし

て一時成立した太平天国が実施した太陽暦「天暦」の年初は立春であった。

そして、この中国の沈括や游子六の考えは日本にも伝えられた。江戸時代に中井履軒が考案した安永九年（一七八〇）の太陽暦「華胥国暦」、それを更に推し進めた享和元年（一八〇一）の「華胥国新暦」、続く山片蟠桃の『夢之代』にある「享和二年天暦」の年初は何れも立春であり、この延長線上に先の市川斎宮の改暦案がある。

一方、現在日本始め世界各国で採用されているグレゴリオ暦は、一五八二年にローマ法王グレゴリウス十三世が制定したものである。これはローマ暦にその源を發しているが、ローマ暦では現在の三月に当たる月が年初であった。

グレゴリオ暦で十一月の月名「December」が第10の月（ラテン語で decem = 10）を意味し、閏日が二月末日に置かれるなどは、その名残である。

私の意見としては、西洋ではむしろ二至二分で季節を区切る感覚ではないでしょうか。中世のころは地域地域によって、一年の始まりがまちまちでした。その中には、クリスマス（十二月二十五日）や受胎告知日（三月二十五日）を一年の始まりとするものも見かけられます。これらは、冬至や春分を時間の区切りとする意識に由来しているように思います。

これは先の須賀隆の回答の一部であるが、次の「グレゴリオ暦の一月一日」に述べるように、グレゴリオ暦の年初

は西洋の天文学的季節区分と係わりの深い春分や冬至という天文学的な要素と、キリスト教最大の行事である復活祭という宗教的な要素が合わさって決定された日取である。明治の改暦当初から新暦による一月一日の日取が日本人に馴染みにくかったとしても、特に不思議はないのである。

参考文献（歳時記は「主要歳時記一覧」参照）

- \* 1 『現代こよみ読み解き事典』岡田芳朗・阿久根末忠編著、二〇〇六年、柏書房
- \* 2 『日本人の暦』長谷川權著、二〇一〇年、筑摩書房
- \* 3 『日本の歳時記別冊・俳句への扉』小学館編、二〇一二年、小学館
- \* 4 ネットサイト「デジタルで読む福澤諭吉」『改暦辯』
- \* 5 『暦と時の事典』内田正男著、一九八六年、雄山閣
- \* 6 『明治改暦―「時」の文明開化』岡田芳朗著、二〇〇三年、大修館書店
- \* 7 『オックスフォード天文学辞典』二〇〇三年、朝倉書店
- \* 8 『増補・気象の事典』二〇〇四年、平凡社
- \* 9 『なるほど！お天気学―天気検定公式テキスト』天気検定編集委員会編、二〇〇八年、毎日新聞社
- \* 10 『アジアの暦』岡田芳朗著、二〇〇二年、大修館書店

# グレゴリオ暦の一月一日

## 第一節 はじめに

明治の改暦で新暦として採用されたグレゴリオ暦の一月一日はどのようにして現在の日取となったのか。そのことについては、既に多数の解説書やサイトがある。

しかし、それらは一長一短で、矛盾や誤りも介在する。私が一定の理解を得るためには、様々の情報を取捨選択し、様々に繋ぎ合わせなければならなかった。

中には、どの解説書やサイトにも明確な記載がなく、長い間悩んだ挙句にハッと思い当たり解決出来たような事柄もあり、備忘録を兼ねて、ここに纏めて置くこととする。

## 第二節 暦法の原理と暦の種類

### 二・一 暦法の原理

暦法とは、人間の生活に必要な自然の周期である日、月、年を如何に調節して日を数えるかにある。

時の流れを区切る周期には、天文学的に日、月、年という三種の周期がある。

即ち、日常生活で使われる一日の周期（太陽日）、太陰（月）の満ち欠けの周期（朔望月）、季節の循環する周期（太陽年）であり、それぞれは次の関係にある。

朔望月 $\parallel$ 二九・五三〇五八九日

太陽年 $\parallel$ 三六五・二四二一九日

〔理科年表・平成24年〕

暦法の原理は、これら三種の周期をうまく組み合わせ、簡単に季節とずれが生じない、社会生活に便利な暦を作ることにある。

右掲のように、暦法に必要な朔望月、太陽年は一日の整数倍にないため、これをうまく調節する必要がある。そして、その調節の仕方によって種々の暦法が生まれて来る。

### 二・二 太陰暦

太陰暦は、月の満ち欠けの周期、朔望月だけを基本周期として日を数える暦法である。したがって、季節の循環周期である太陽年に無関係であり、農事などには適さない。

暦の発生当時は何れの民族・国家でも、この太陰暦であったと考えられるが、現在この暦法に従うものとしてはイスラム暦だけである。

暦の計算では、朔望月の端数を除いて、一カ月の日数を



二九日（小の月）あるいは三〇日（大の月）とし、大小の月を適当に配列して、暦の上の一カ月の平均の長さを朔望月に等しくし、一年を十二カ月としたものである。

太陰年  $\parallel$  朔望月  $\times$  一二カ月

$\parallel$  二九・五三〇五八九日  $\times$  一二

$\parallel$  三五四・三六七〇七日

太陽年—太陰年

$\parallel$  三六五・二四二一九日—三五四・三六七〇七日

$\parallel$  一〇・八七五—二日

即ち、太陰暦の一年は太陽年より一〇・八七五—二日少ない。したがって、太陰暦で日を数えていると、季節が循環する太陽年（太陽暦の一年）に対して、一年で約十一日ずつずれて行く。そのずれは三年で約一カ月、十一年で約三カ月、十七年では約六カ月となり、夏と冬、春と秋の季節が逆転する。

## 二・三 太陰太陽暦

太陰太陽暦は、月の満ち欠けする周期である朔望月で日を数え、太陽の運行による周期である太陽年を以て季節を調節して行く暦法である。

数年ごとに閏月を挿入して暦の上の一年の平均の長さを太陽年に等しくする。バビロニア暦、ギリシア暦、ユダヤ暦、中国暦、日本の旧暦などがこれに当たる。

太陰暦で述べたように、太陰暦の一年は太陽年より約十日（一〇・八七五—二日）少なく、一朔望月は二九・五三〇五八九日である。太陰年と太陽年とのずれは、次のように十九年で七カ月となる（メトンの周期）。

一〇・八七五—二日  $\times$  一九年

$\parallel$  二〇六・六二七二八日

二〇六・六二七二八日  $\div$  二九・五三〇五八九日

$\approx$  六・九九七朔望月

即ち、十九年に七回の閏月を置けば良いということになる（十九年七閏法、メトン法）。

## 二・四 太陽暦

太陽暦は、太陽の運行による周期で季節の循環周期でもある太陽年だけを基本として日を数える暦法である。

太陽暦の起源はエジプトにあり、エジプト暦、ペルシア暦、ユリウス暦、グレゴリオ暦（日本の新暦）などがこれに当たる。

太陽暦において、太陽年（三六五・二四二一九日）の端数を取り、一年を三六五日とした場合のずれを調節するために挿入するのが閏年の閏日である。詳細は後に述べるユリウス暦、グレゴリオ暦で紹介する。

## 第三節 ローマ暦

### 三・一 ロムルス暦

ロムルスは前八世紀（伝承では前七五三年）にローマを建設し初代の王となった伝説的英雄で、ローマの名は自らの名を冠して付けたとされる。ロムルスは一年を三〇四日とし、十カ月からなる暦を用いた（表1）。

一年は春分を含む月である第一月マルティウスの第一日カレンデ（カレンダーの語源、毎月一日をいう）から始まる。

この暦は太陰暦とも太陽暦ともつかぬ奇妙な暦で、一年を三〇四日とした根拠は不明である。自然界にはこれに近い周期は存在せず、古代ローマ人が三〇四日の暦年を連続して使ったとは思えない。

農事暦であったため農作業を行わない季節に日付は必要なかった、農作業も戦いも出来ない冬の約六十日間の名前がなかったなど、諸説がある。

### 三・二 ヌマ暦

前八世紀末、第二代王ヌマ・ポンピリウスはロムルス暦の不備を補い、第十月のあとに第十一月ヤヌアリウス（二九日）、第十二月フェブルアリウス（二八日）の二カ月を加えて一年を十二カ月とし、次いでロムルス暦の三〇日の

表1 ローマ暦の月名と日数（文献\*4より）

月	名	月名の意味	ロムルス	ヌマ
1	マルティウス	Martius 軍神マースの月	31日	31日
2	アプリリス	Aprilis (大地) 開く月 (aperio=開く)	30	29
3	マイウス	Maius 生長の女神マイア maia の月	31	31
4	ユニウス	Junius 繁茂の女神ユノー Juno の月	30	29
5	クインティリス	Quintilis 第5の月 (quinque=5)	31	31
6	セクステリス	Sextilis 第6の月 (sex=6)	30	29
7	セプテンベル	September 第7の月 (septem=7)	30	29
8	オクトーベル	October 第8の月 (octo=8)	31	31
9	ノーヴェンベル	November 第9の月 (novem=9)	30	29
10	デケンベル	December 第10の月 (decem=10)	30	29
11	ヤヌアリウス	Januarius 門戸の神ヤヌスJanusの月	—	29
12	フェブルアリウス	Februarius 疫病の神フェブリスFebrisの月	—	28
計			304	355

月は二九日に、三十一日の月はそのままにして、一年三五五日から成る暦を制定した（表1）。

フェブルアリウス以外の月の日数が全て奇数となっているのは、偶数を不吉な数として嫌い、奇数を幸運の数として喜ぶローマ人の風習によるとされる。これは奇数を陽数、偶数を陰数とし、九月九日を重陽の節句として祝うなどの日本の風習（陰陽道）にも通じるものである。

ヌマ暦は一年が三五五日の太陰暦であったから、このままでは暦日と季節との間にずれを生じる。このずれを調節するために、フェブルアリウスの第二十三日と二十四日との間に、二年ごとに二二日または二三日の一カ月を閏月（メルケドニウス、恵みの月の意）として交互に挿入する制度が導入された。

これは四年間で四五日、年平均一一・二五日を平年（三五五日）に加えることであり、一年は平均三六六・二五日となり、太陽年三六五・二四二・九日より約一日多い。

即ち、二年ごとの閏月の日数を二〇日または二一日として閏日を四年間で四日減らせれば、太陽年との差はほとんどなくなる。何故そうしなかったのか。私見では、まだ正確な太陽年の知識がなかったとも思われるし、閏月の設定には一定の原則がなかったとも言われている（文献\*5）。

また、閏月をフェブルアリウスの月末でなく二十三日と二十四日との間に挿入したのは、フェブルアリウス二十三日は辺境守護神テルミニヌスを祭るテルミナリアという祭日

で、フェブルアリウス十四日以降はテルミナリア前幾日と数え、二十四日以降は翌月、つまりマルティウスのカレンデ（第一日）前幾日と数える習慣があり、テルミナリアはあたかも年末のような感があったからである。

なお、前六〇〇年頃に第五代王タルクイニウス・プリスクスが制定したタルクイニウス暦の存在を挙げ、この暦で閏月の制度が導入され、同時に年初が第一月マルティウスから第十一月ヤヌアリウスに変更されたとする論考（文献\*5）がある。

このように、古代の著述家たちの断片的な記述を元にした古代ローマの暦の変遷は不確かな要素を多く含む。しかし、次の三点は各文献にほぼ共通しているようである。

①時期は別として、右掲のような閏月の制度を導入したこと。

②前一五三年（ローマ建国紀元六〇一年）以降はヤヌアリウスを以て公務上の年始の月としたこと。

③その後も長い間、以前からの習慣で、一般には一年はフェブルアリウスの二十三日（テルミナリアの祭日）に終わると考えられていたこと。

#### 第四節 ユリウス暦

ユリウス・カエサルは前四十九年、ポンペイウスを倒して政権を握ったが、これまでの為政者たちの都合で閏月の

挿入がなおざりにされるなどで、前四十七年の時点で、暦日は二カ月以上、六七日も進んでいた。

カエサルはこのずれを解消するため、前四十六年、十二月三十五日に正規の閏月メルケドニウス二三日と第二閏月六七日を加え、この年の日数を四四五日とした。後世、この年は「最後の乱年」と呼ばれた。

また、このような混乱が再び起こらないように、暦をローマ暦の太陰太陽暦から次のような太陽暦に改め、翌年の前四五年一月一日より実施した(表2)。

- ① 一年を三六五日とする。
- ② 四年ごとに閏年を設け、一日の閏日をフェブルアリュス二十三日と二十四日の間に入れる。
- ③ 前一五三年以降公式的に公務上の年始としていたヤヌアリュスを年首の月とする。
- ④ 改暦第一年の年初、即ち前四五年一月一日を旧ローマ暦(太陰太陽暦)のヤヌアリュス第一日、即ち朔日(新月の日)に一致させる。そして、「その年初は冬至の近くに設定したことは確かかのように」と文献\*6にある。
- ⑤ ヤヌアリュスを三一日、フェブルアリュスを二九日、マルティウス以降は交互に三一日、三〇日とする。
- ⑥ 七月(カエサルの誕生日)の月名をユリウスとする。

これがユリウス暦であり、カエサルがエジプト遠征で遭遇したシリウス暦(エジプト太陽暦が生まれる基準となっ

表2 ユリウス暦

月名	ユリウス	アウグストゥス
1 ヤヌアリュス	31日	31日
2 フェブルアリュス	29, 30	28, 29
3 マルティウス	31	31
4 アプリリス	30	30
5 マイウス	31	31
6 ユニウス	30	30
7 ユリウス	31	31
8 アウグストゥス	30	31
9 セプテンベル	31	30
10 オクトーベル	30	31
11 ノーヴェンベル	31	30
12 デケンベル	30	31
計	365, 366	365, 366

た、シリウス星による恒星暦)に習ったものである。

カエサルはユリウス暦施行の翌年、前四四年に暗殺される。そのためかどうか、早速に閏日の置き方を誤り、前四年から四年でなく三年ごとに閏日を置いたため、前九年までに三日のずれを生じていた。

カエサルのあとを継いだオクタウィアヌスは前二七年、アウグストゥスの称号を得てローマ帝国初代の皇帝となった。彼はユリウス暦に生じた三日のずれを解消するため、

前六年から後四年まで全く閏日を置かず、後八年から四年ごとに閏日を置くこととした。

また、八月の月名をアウグストゥスとした。これは、かつてオクタウィアヌスがアントニウス・クレオパトラの連合軍を撃破し、アクティウムの海戦に勝利を収めた記念とされる。

そして、二月を一日減らし、自らの名を冠した八月を一日増やしユリウスの名を冠した七月と同じ大の月三一日にして、各月の日数を表2のように定め、大の月と小の月を交互に配置したユリウス暦の配列を替えた。この各月の日数が次のグレゴリオ暦を経て現在まで受け継がれている。

ユリウス暦は四年の間に一日の閏日を置く。それは一年を平均で三六五・二五日とすることである。

ユリウス暦の一年―太陽年

Ⅱ 三六五・二五日―三六五・二四二一九日

Ⅱ 〇・〇〇七八一日

即ち、ユリウス暦の一年は実際の太陽年より〇・〇〇七八一日（約十一分十五秒）だけ長く、そのずれは百年で約十九時間、一二年で約一日、一千年で約八日となる。

## 第五節 ニカイア公会議

三二五年、小アジアのニカイア（現在名イズニク、トルコ北西部）で、ローマ皇帝コンスタンティヌス一世の召集

により、キリスト教会最初の世界的な宗教会議（ニカイア公会議）が開かれた。

そして、この会議で、三月二十一日（会議当時におけるユリウス暦の春分の日取）を春分として暦上に固定し、復活祭は春分もしくはその直後の満月の後の最初の日曜日とすることと定め、長年の論争に一応の決着を付けた。

キリスト教最大の行事、復活祭はユダヤ教の過越祭がキリスト教時代に新しい意味を得てキリストの死と復活とを記念する祭になり、更にゲルマン民族の春の祭典とも融合して出来上がったものである。

復活祭は英語でイースター、ドイツ語でオースターン（ゲルマン神話の春の女神エオストレに由来）であるが、ギリシヤ語ではパスハ（過越祭を表すヘブライ語ペサハに由来）と呼ばれるのは、この辺りから来ている。

このように、復活祭は民族によって様々な意味があり、また、ユダヤ暦は太陰太陽暦、ユリウス暦は太陽暦と採用する暦法が異なるため、以前からその日取について論争が絶えなかった。

先に「一応の決着」と書いたように、この問題は現在も完全には決着が付いていない。また、この会議の最も重要な決定事項は、父と子と聖霊の三位一体説をとるアタナシウス派を正統とし、アリウス派を異端とするニカイア信条を採択し、アリウス派の追放を決定したことであるが、何れも本稿のテーマからは離れるので、詳細は省略する。

## 第六節 グレゴリオ暦

ユリウス暦の最後に述べたように、ユリウス暦の一年は実際の太陽年より〇・〇〇七八一日だけ長く、一三二八年で約一日のずれを生じる。そして一五八二年、このずれを根本的に解消するために、ローマ法王グレゴリウス十三世により導入されたのが、日本の新暦始め今日世界各国で広く採用されているグレゴリオ暦である。

即ち、三二五年のニカイア公会議で三月二十一日に固定した筈の春分が、一五八二年には三月十一日と、十日も早くなっていた。

〇・〇〇七八一日×(一五八二—三二五)

〓九・八一七七日〓一〇日

表3は、ユリウス暦による各年三月の春分の日付一覧である。ユリウス暦は実際の太陽年と一三二八年で約一日のずれを生じる。春分の日付が五百年ごとに三・九日(五〇〇年÷一三二八年≒三・九)早くなっていることが分かる。

なお、表3にはアウグストゥスが二月の日数を二九日から二八日と一日減らしたことによる、春分の日付の一日のずれが反映されていない。表中で、ニカイア公会議当時の春分の日付が二十一日でなく二十日(二〇・三日)、グレゴリオ暦制定時の春分が十一日でなく十日(一〇・五日)となっているのはそのためである。

また、表中に三月二十三日(二三・二日)とあるユリウス暦施行当時の春分は、文献\*2などでは三月二十五日としてあるが、それは当時の天文学のレベルでは現在のように正確な春分を求めることが出来なかったためである。

表3 春分の3月の日付  
(ユリウス暦による)

年	春分(日)	備考
-500	26.7	
000	22.8	
500	18.9	
1000	15.0	
1500	11.1	
-045	23.2	*ユリウス暦
008	22.9	*アウグストゥス改暦
325	20.3	*ニカイア公会議
1582	10.5	*グレゴリオ暦

注1: 小数点以下はグリニジ時(太陽が子午線を通過する正午より測る)を10進法で表したもの。  
注2: 文献\*6の表19に筆者の計算(備考欄に\*印のあるもの)を加えて作成

グレゴリウス十三世は、キリスト教最大の行事である復活祭の日取決定に重要な春分の日付を、当時の三月十一日からニカイア公会議で決定した三月二十一日に戻し、今後こうしたずれを生じないように次のような措置を取った。

① 一五八二年十月四日の次の日を十月十五日とし、暦

の上から十日分を省く。

②西暦紀元年数が四で割り切れる年を閏年とする。

③但し、四百で割り切れない年は閏年としない。

④閏日は二月末日、二十八日の翌日に挿入する。

こうして制定されたのがグレゴリオ暦であるが、これは四百年に九十七回の閏年を設け、計九十七日の閏日を加えることである。

グレゴリオ暦の四百年における一年の平均日数

|| (二六五日×四〇〇+九七日)÷四〇〇

|| 三六五・二四二五〇日

グレゴリオ暦の一年―太陽年

|| 三六五・二四二五〇日―三六五・二四二一九日

|| 〇・〇〇〇三一日

したがって、グレゴリオ暦と実際の太陽年との差は一年で〇・〇〇〇三一日、百年で〇・〇三一日、千年で約〇・三日、三二二六年で約一日、一万年で約三日となる。

渡辺敏夫『暦入門―暦のすべて―』には「一万年で三日の差は実際問題としては、現在では何ら日常生活の妨げとなるほどのものではない。」とある。

しかし、今年(二〇二二年)の七月一日には「うるう秒」を実施し、地球の自転速度に標準時刻を合わせるため、午前八時五十九分五九秒と午前九時との間に「午前八時五十九分六〇秒」(日本での月日、時分秒)を入れるというのであるから、随分と忙しない世の中になったものである。

## 第七節 おわりに

以上、日本の新暦に採用されたグレゴリオ暦の一月一日が、どのような経緯で現在の日取となったかを見て来た。要約すると次の通りである。

①ローマ暦(前八世紀)では、春分を含む月、マルテイウス(現在の三月)を年首の月とした。

②ユリウス暦(前四五年)では、公務上の年始としていたヤヌアリウス(現在の一月)を年首の月とし、その第一日である一月一日を年初とした。そして、改暦第一年の年初が冬至に近い朔日(新月の日)となるようにした。

③ニカイア公会議(三二五年)では、キリスト教最大の行事、復活祭の日取決定に重要な春分の日付を三月二十一日(会議当時におけるユリウス暦の春分)に固定した。

④グレゴリオ暦(一五八二年)では、三月十一日にずれていた春分をニカイア公会議で固定された日付、三月二十一日に戻した。また、今後このようなずれが生じないように、閏年の設定を変えた。

このように、グレゴリオ暦の年初、一月一日は冬至や春分という天文学的な要素と、改暦や復活祭という人為的な要素とが様々に合わさって決定されたものである。

そして、そこには春分や冬至の語はあっても、立春や立冬の語は何処にも見られない。

先に述べたように、西洋の天文学的季節区分は二至二分（春分、夏至、秋分、冬至）を季節の始点とする。一方、東洋のそれは二至二分を季節の中央に置き、四立（立春、立夏、立秋、立冬）を季節の始点とする。恐らく、西洋では四立という概念自体、馴染みの薄いものであろう。

結局、暦がどのような変遷を遂げようと、このように西洋と東洋の天文学的季節区分が根本的に異なる限り、西洋と東洋の暦の季節区分、ひいては、それと係わりの深い年初の日取が同じになることはなかったと思われる。

即ち、明治の改暦により生じた旧暦と新暦の年初のずれは、太陰太陽暦と太陽暦という暦法の相違によるものではない。旧暦と新暦の源となった東洋と西洋の季節の捉え方の相違に、その根本的な要因があったのである。

文献\*6などによれば、『日本書紀』に具体的な中国暦法の名前が出て来るのは持統四年（六九〇）十一月の条に「甲申に、勅<sup>おこな</sup>を奉<sup>うけたまは</sup>りて、始めて元嘉<sup>げんか</sup>暦と儀鳳<sup>ぎほう</sup>暦とを行<sup>おこな</sup>ふ。」（文献\*7）とあるのが初見で、持統三年（六八九）の暦が現存最古の元嘉暦として、奈良県明日香村石神遺跡出土の木簡に記されている。一般には推古十二年（六〇四年）に初めて元嘉暦が用いられたとされる。

また、『暉峻康隆の季語辞典』によれば、中国の『荆楚歳時記』に記される立春の行事が、奈良時代の公事として

『続日本紀』（七九七年）にあり、『万葉集』（諸説あるが、八〇〇年までには成立）に五首、『古今集』（九〇五年撰進）には五十余首の立春の歌がある。

二十四節気は、旧暦においては、太陰太陽暦の暦日と季節とのずれを解消し、季節を調節して行く指標として用いられたが、以上を総合すると、二十四節気は、新暦においては、また別の大きな意味を持つことが分かる。

即ち、日本において一四〇〇年の長きに亘って培われて来た東洋の季節感と、東洋とは係わりの薄い西洋の季節感に基づく現行の太陽暦（新暦）の日取とのずれを解消し、東洋の季節感を新しい暦の上にきちんと位置付け調節して行く指標として用いる。これが新暦における二十四節気の新たな意義、役割であると思うのである。

参考文献（歳時記は「主要歳時記一覧」参照）

\*1 『こよみと天文』渡辺敏夫著、一九七七年、恒星社

\*2 『暦入門―暦のすべて―』渡辺敏夫著、一九九四年、

雄山閣

\*3 『理科年表・平成24年』国立天文台編、二〇一一年、

丸善

\*4 『改訂増補・天文学辞典』鈴木敬信著、一九九一年、  
地人書館

\*5 『2月はどうして28日なのか?』に関連して「高



- 橋正男、ネットサイト「暦の会」―「特別寄稿」所収
- \* 6 『時と暦』青木信仰著、一九八八年、東京大学出版会
- \* 7 『日本書紀③』小島憲之他校注・訳、新編日本古典文学全集、小学館
- \* 8 『暉峻康隆の季語辞典』暉峻康隆著、二〇〇三年、東京堂出版
- \* 9 『荆楚歳時記』宗懐著、守屋美都雄訳注、一九七八年、東洋文庫、平凡社

# 日本版二十四節気

## 第一節 はじめに

先の「二十四節気と新暦」、「グレゴリオ暦の一月一日」で述べたことを、ここでもう一度要約して置くと次の通りである。

### (1) 西洋と東洋

西洋の天文学的季節区分は二至二分（春分、夏至、秋分、冬至）を季節の始点とする。一方、東洋のそれは二至二分を季節の中央に置き、四立（立春、立夏、立秋、立冬）を季節の始点とする。

これは西洋と東洋の季節感が根本的に異なることを示すものであり、結局、暦がどのような変遷を遂げようと、西洋と東洋の暦の季節区分、ひいては、それと係わりの深い年初の日取が同じになることはなかった。

### (2) 二十四節気と太陽暦

二十四節気は太陰太陽暦である旧暦の太陽暦の部分を受け持つ役割を果たすものであった。二十四節気は旧暦の遺物などではなく、太陽暦である新暦に移行した後も、中国

や日本に定着する代表的な季節区分としてその価値は何ら変わることはない。

中国、日本には太陰太陽暦、太陽暦を通じて、暦に二十四節気を用いる伝統がある。明治の改暦においても二十四節気を用い立春を年初とする太陽暦の提案がなされたが、採用されなかった。

### (3) 明治の改暦

明治六年（一八七三）に始まる太陰太陽暦の天保暦（旧暦）から太陽暦のグレゴリオ暦（新暦）への改暦は歳時記にも大きな影響を与えたが、それは歴法的に太陰太陽暦が太陽暦に代わったことに根本の因があるのではない。

旧暦では平均で立春（新暦の二月四日頃）にあった年初が新暦の一月一日となり、その日取が約三十五日、ほぼ一カ月早まったことが最大の要因である。

### (4) 二十四節気の意義

旧暦においては、二十四節気は太陰太陽暦の暦日と季節とのずれを解消し、季節を調節して行く指標として用いられた。

新暦における二十四節気の新たな意義、役割は、東洋とは係わりの薄い西洋の季節感に基づく新暦の日取と東洋のそれとのずれを解消し、日本において一四〇〇年の長きに亘って培われて来た東洋の季節感を新しい暦の上にきちんと位置付け、調節して行く指標として用いることにある。

### (5) 現行の太陽暦（新暦）に基づく季節区分

① 東洋の天文学的季節区分（二十四節気）

立春から立夏の前日、およびその二月から四月までを春とする、等々。

② 気象学的季節区分

三月から五月までを春とする、等々。

③ 西洋の天文学的季節区分

春分から夏至の前日までを春とする、等々。

(6) 新たな動向

二〇〇四年に、従来の①ではなく②を季節区分に採用した現代俳句協会編『現代俳句歳時記』が刊行された。

また、昨年（二〇一一年）からは、日本気象協会が主導する「日本版二十四節気」策定の動きが始まった。

これらは何れも二十四節気に基づく①の季節区分に代わり、「生活実感」に基づく②の気象学的な季節区分を歳時記や実生活に導入しようとするものである。

(7) まとめ

本稿では、これらのことを踏まえた上で、(6)に述べた新たな二つの動向について検証を行う。

その前に、倉嶋厚『季節の366日話題事典』に付された「二十四気物語」の一節をここに紹介して置く。

これは「新歳時記考序説」（「新歳時記通信」創刊号）にも引用したものであるが、立春など四立を四季の始点とする東洋の季節区分と春分、夏至など二至二分を始点とする西洋の季節区分との相違について次のように解説している。

東洋の季節区分は「昼間の長さ」（この場合は「光の強さ」に相当する）から見ると見事にシンメトリ（対称的）ですが、気温を見ると、寒さのドン底で春が始まり、暑さの絶頂で秋が立つなど、たいへんアンバランスです。これは大気が光の変化に応じて暖まったり冷えたりするのに、約一か月半ほど遅れるからです。その点、西洋の四季の区分は気温についてほぼシンメトリになっています。東洋の区分は季節変化の原因、西洋は結果に注目しているともいえそうです。

東洋の暦の立春は、まだ厳寒の北風の中に「春の光」を、立夏はまだ冷涼な大気中を横切る「真夏なみの光」を、立秋は暑さの盛りの中で光が「僅かに衰えたきざし」を、立冬は収穫の終わった野を照らす柔らかな「初冬の光」を見る日なのです。

気温の変化に著しく先行している東洋の季節区分は、真夏の暑さに成熟のタイミングを合わせて、早め早めに細かい農耕順序を勤勉に踏んでいかなければならない水稻栽培の農事暦に適しており、また、しのびよる次の季節の気配をいち早く感じとろうとした歌人、俳人にも積極的に受け入れられたものと思われれます。

第二節 現代俳句協会編『現代俳句歳時記』

二〇〇四年、従来の二十四節気に代り、気象学的な季節

区分を採用した現代俳句協会編『現代俳句歳時記』が刊行された。その功罪については、既に「新歳時記考序説」で詳述したが、第一節の内容を踏まえて、ここでもう一度述べて置くこととする。

この歳時記が最も大きな反響を呼んだのは、三月から五月までを春、などとすることにより、「立春」が冬に配されるなどの問題が生じたことである。同歳時記は次のように説明する。

立春には、間近に来る春への期待感があるものとして、冬の終わりに配し、名づければ「さきがけ季語」としたものである。（序にかえて）

この歳時記が三月から五月までを「春」としたのは、伝統的な季節区分を否定しようという意図ではなく、気象用語にも現れている日本の気候の実態、言い換えれば、われわれの平均的な生活実感に準拠したのである。（「春という季節」）

これに対して、「新歳時記考序説」では、「さきがけ季語」などという概念を導入しても解消出来ない、主として時候の部の季節に露出する季節体系の明白な自己矛盾を具体的に指摘した上で、次のように述べた。

季語体系に明白な矛盾を生じている『現代俳句歳時記』に言う「さきがけ季語」よりも、従来の俳句歳時記の「しのびよる次の季節の気配をいちはやく感じとうろ」とした（筆者注、前節末尾の倉嶋厚の文の一節）という

意味の「さきがけ季語」の方が、既に確立した季語体系を形成していることにおいても優よっていると見える。

結局、『現代俳句歳時記』の試みの混乱は、二十四節気を規準とする一つの確立した季節区分に直接係わる季語を、もう一つの別の季節区分で再度区分しようとしたことに起因する。

現行の太陽暦（新暦）に基づいて季節区分を行ったことを第一の特色に挙げる『現代俳句歳時記』であるが、前節で述べたように、二十四節気に基づく従来の季節区分もまた、現行の太陽暦に基づく季節区分である。

したがって、『現代俳句歳時記』の妥当性の全ては、「われわれの平均的な生活実感に準拠」した気象学的季節区分に基づく季節体系が二十四節気に基づく従来のそれより妥当性があるかどうかにか帰する。

しかし、『現代俳句歳時記』は「立春」を「さきがけ季語」と名付け冬の終わりに配するなどの一方で、「立春」の傍題に「春立つ」、「春来る」を配し、春の季節に「春浅し」（立春は過ぎたものの、本格の春ではない。）、「余寒」（立春を過ぎてからの寒さ。）、秋の季節に「残暑」（立秋以後も続く暑さという。）を配して、それぞれ括弧内のように解説するなどする。

これでは丸で従来の二十四節気に基づく「生活実感」と同じであり、何ら変わる所はない。

幾ら気象学的季節区分に基づく「われわれの平均的な生

活実感”を言おうとも、二十四節氣に直接係わる季題を意義あるものとして歳時記に掲載し解説することは即ち、二十四節氣に基づく従来の生活実感を受け入れることに他ならない。こういう結果になるのは当然の帰結である。

結局、『現代俳句歳時記』の趣旨を整合性を以て実現するためには、二十四節氣と係わりのある全ての内容を歳時記から抹消し、「余寒」など二十四節氣と係わりの深い季題を残す場合も、その解説を「三月になってからの寒さ。」とするなど、二十四節氣と係わりのないものにしなればならない。

現行の歳時記は二十四節氣に基づく従来の季節区分を採用する一方で、「春」の解説には前節に挙げた様々の季節区分を全て紹介し、「立春」は次のように解説するなど、『現代俳句歳時記』の趣旨と同じ内容を、既にその季題解説に実質的に反映させている。

寒さはまだ厳しいとはいえ、立春ともなれば、梅の蕾は膨らみ、日の光もその色合いが微妙に変わってくる。寒中の厳しさの名残を充分感じつつ、意識を春へとゆっくり向けてゆく季語として、立春の存在価値は大きいといえる。(『角川俳句大歳時記』)

立春からの所謂「暦の上」の春、三月からの「われわれの平均的な生活実感」としての春、「暑さ寒さも彼岸まで」と言われる春分からの本格的な春、これら三様の春それぞれが季題「春」の所謂本意を形成する一要素であり、

夏、秋、冬も同様である。

式目の厳格な連句のためならいざ知らず、今日の俳句においては、季題の厳密な季節区分など、季節の軸で構成する現行の歳時記を編纂するための都合でしかない。

「春」、「夏」、「秋」、「冬」のみならず、『現代俳句歳時記』の「序にかえて」で指摘する「七夕」など新暦と旧暦双方の日取で行われる行事、立秋の前後に跨がる原爆忌や夏休み、更には「通季」の語を含め、それぞれの季題が実際に係わる季節の幅はもつとずっと広い。

そして、俳句の実作者はそのことを十分に心得て、自在に歳時記を活用している。

二十四節氣を規準とする一つの確立した季節区分に直接係わる季題を、もう一つの別の季節区分で再度区分しようとしたことに起因する『現代俳句歳時記』の試みの混乱は、季題を厳密に季節区分することの弊と愚を改めて浮彫にした。

また、歳時記は旧暦で一月から三月までを春、等々としていたものを、新暦では二月から四月までを春、等々とし、新年を冬とは別に立項するなど、改暦による約一カ月の季節と日取のずれを上手に調整し、時代に即応して来た。

これが「かつての太陰太陽暦との妥協の産物」(『現代俳句歳時記』「序にかえて」)であると言うのであれば、先の際の部の季題を中心に自己矛盾を抱えている『現代俳句歳時記』もまた、別の意味での「かつての太陰太陽暦との妥協の産物」と言わざるを得ないのである。

### 第三節 日本版二十四節気

#### 三・一 「日本版二十四節気」の動き

前節に述べた現代俳句協会編『現代俳句歳時記』の試みは二十四節気に基づく従来の季節区分を「われわれの平均的な生活実感に準拠」した気象学的季節区分の中に取り込もうとするものであった。

それに対して、本節で述べる「日本版二十四節気」は二十四節気そのものを「日本の季節感」に合わせて改変しようとするもので、日本気象協会が二〇一一年度より約一年半の予定で実施している事業である（文献\*2）。

これは、次の二点を理由に、「二十四節気を天文学・気象学のみならず、言語学や日本文化を含めた多面的な見地から見直し、親しみを感じる季節の言葉に置き換えた『日本版二十四節気』を提案する」というものである。

①従来の二十四節気は古代中国で成立したため、地域や時代などの違いから日本の季節感と合致しない所がある。

②現代の日本には馴染みの薄い節気の呼称がある。

第一回の「日本版二十四節気専門委員会」が開催されたのは二〇一一年十二月である。

また、二〇一二年二月には「二十四節気や暦、日本人の

季節感についてのフォーラム」としての「第三回日本気象協会メセナ」季節が薫るひととき」が開催されている。

そして、広く一般からの意見を募集し、二〇一二年秋を目途に「日本版二十四節気」を提案する予定であるという。

この専門委員会やメセナのメンバーには、先の「二十四節気と新暦」に登場した「暦の会」会長の岡田芳朗、俳人の長谷川權が含まれている。

長谷川は二十四節気の見直しに批判的であることを表明している（文献\*3）。そして、やるべきことは他にあるとして、具体的な提案を述べているが、そのアプローチの仕方は、どちらかと言えば情緒的なものである。

ここでは簡単なシミュレーション（模擬実験）も交え、より科学的、実証的なアプローチで以て、「日本版二十四節気」の是非について検証を行う。

#### 三・二 「日本版二十四節気」策定のシナリオ

(一) 二十四節気の故郷

岡田芳朗『アジアの暦』によれば、中国の暦法史料上で二十四節気（二十四気）の名称が見られる最初は『統漢書・律曆志』（後漢書）に充用、文献\*5）である。

また、二十四節気は中国最古の实在の王朝、殷の時代の頃にその起源があり、殷の都（現在の河南省辺り）があつ

た黄河中流域の気候に基づいていとされる。  
 したがって、二十四節気を黄河中流域とは異なる日本の  
 気候にそのまま適用すると、ずれがあるという。しかし、  
 実際はどうか。

表1 気温の月別平年値(°C)

地点	西安	京都	東京	長野
北緯	34° 18′	35° 1′	35° 41′	36° 40′
標高	398 m	41 m	6 m	418 m
1月	0.3	4.6	6.1	-0.6
2月	3.4	5.1	6.5	0.1
3月	8.7	8.4	9.4	3.8
4月	15.4	14.2	14.6	10.6
5月	20.5	19.0	18.9	16.0
6月	25.2	23.0	22.1	20.1
7月	26.9	26.8	25.8	23.8
8月	25.1	28.2	27.4	25.2
9月	20.3	24.1	23.8	20.6
10月	14.1	17.8	18.5	13.9
11月	7.2	12.1	13.3	7.5
12月	1.4	7.0	8.7	2.1
年	14.0	15.9	16.3	11.9

西安:1981~2005年の平均値

京都、東京、長野:1981~2010年の平均値

(『理科年表 平成24年』)

表1は、その黄河中流域、河南省に西隣する陝西省の省  
 都、西安と日本の京都、東京、長野の毎月の平均気温を比  
 較したものである。日本気象協会のホームページでは西安  
 と長野の比較のみであるが、ここでは、それに加えて西安

と京都、東京の比較も行ってみることにする。

## (二) 西安と長野

日本気象協会が中国の西安と比較する日本の基準地とし  
 て何故、京都や東京でなく、長野を選んだかについては明  
 確な説明がないが、次の二つの理由が考えられる。

① 長野は盆地性気候で、大陸性気候の西安と似ており、  
 標高も同じように高い。(しかし、京都も標高は低  
 いが、長野と同じ盆地性気候である。)

② 長野のデータは、二十四節気見直しの妥当性を主張  
 するのに都合が良い。

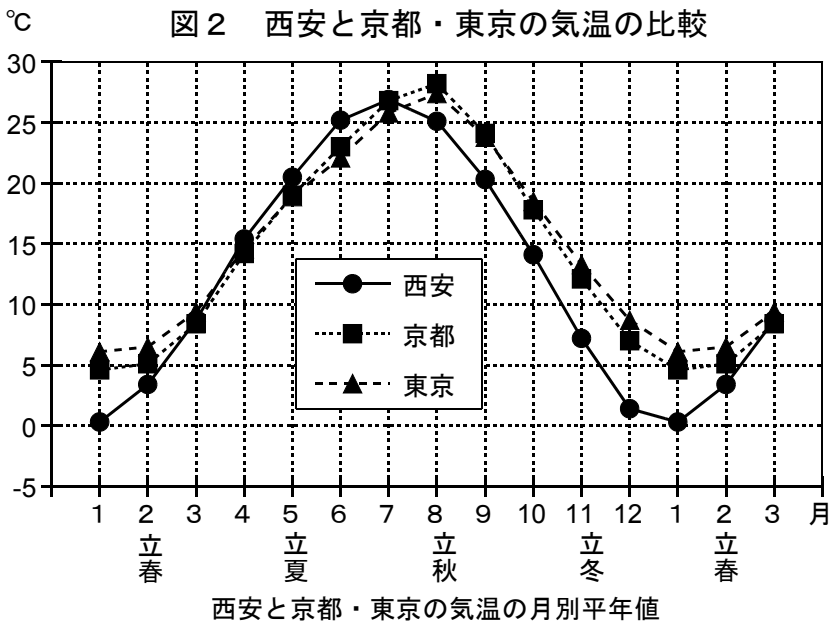
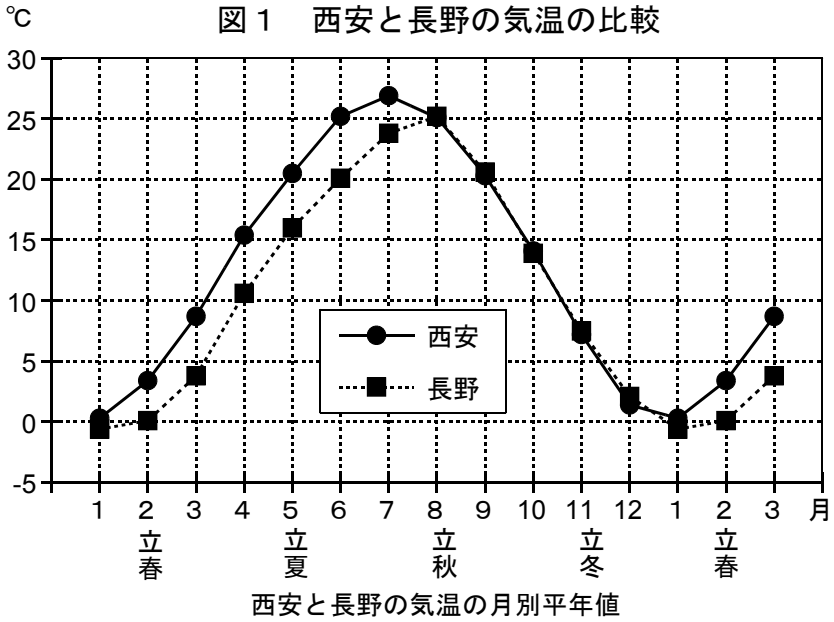
図1は西安と長野の月別の気温をグラフにしたものであ  
 る。日本気象協会のホームページ(第一回日本版二十四節  
 気専門委員会配布資料、文献\*2)にも、これと同様のも  
 のが掲載され、グラフ上に次の①②③のコメントを添付す  
 る形で両地点の比較結果が示されている。

① 「春から夏へ、長野は西安より一ヶ月遅れ」。

② 「暑さのピーク、西安は七月、長野は八月」。

③ 「冬から春へ、西安の方が早く暖かくなる」。

これらは、西安の一月と七月のグラフを約一カ月分、右  
 にずらせば、長野のグラフに重なることを指しており、何  
 れも一月と七月の間、長野は西安より季節の変化が一カ月  
 遅れることを示している。





しかし、その後の八月～一月の半年間、西安と長野の気温にずれがないという、次のような結果は何故かコメントされていない。

④「秋から冬へ、八月から一月までの半年間、西安と長野の気温は見事に一致し、ずれがない」。

### (三) 西安と京都、東京

図2は西安と京都、東京の月別の気温をグラフにしたものである。中国の西安と比較する日本の基準地として、京都、東京を選んだのは勿論、京都は歳時記のかつての基準地、東京は現在の基準地とされる所だからである。

先の日本気象協会のコメントを真似る形で、比較結果の主な特徴を挙げると次の通りである。

①「春から夏へ、西安、京都、東京の気温の推移は、ほぼ同じ」。

②「暑さのピーク、西安は七月、京都、東京は八月」。

③「秋から冬へ、京都、東京は西安より一ヶ月遅れ」。

④「冬から春へ、西安、京都、東京の寒さのピークは共に一月、三地点の暖くなる時期にずれはない」。

⑤「冬から春へ、京都、東京の方が西安より暖かい」。

これらの結果を見れば、日本の方が秋、冬の訪れが一ヶ月遅く、残暑が少し厳しくらいで、二十四節気の故郷である中国の西安と、二十四節気をそのままに受け入れた日

本の京都、東京とで、その気候に言われる程の大きな差はない。

また、西安と京都、東京とで春の訪れが同じ時期で、京都、東京の方が西安より暖かいとなれば、少なくとも立春の時期を今より遅くする必然性は何もない。

ここまで来れば、日本気象協会による「日本版二十四節気」策定のシナリオのおおよそが見えて来る。

①「日本版二十四節気」とは、第一節の末尾に述べた倉嶋厚の文にあるような東洋的季節感に基づく二十四節気を、日本気象協会が是とする「われわれの平均的な生活実感に準拠した」気象学的季節区分に合わせたものに改変することである。

②気象学的季節区分による春は三月からで、二十四節気による立春（二月四日頃）からの春に対して、約一カ月の遅れであり、夏、秋、冬も同様である。

③この一カ月の季節の遅れを現状の二十四節気に適用することの妥当性を主張するには、季節の訪れが西安より一ヶ月遅れるとされる長野のデータが都合が良い。また、都合の悪いデータは取り上げない。

前節で述べたように、現代俳句協会編『現代俳句歳時記』の試みの混乱は、二十四節気を規準とする一つの確立した季節区分に直接係わる季語を、もう一つの別の季節区分で再度区分しようとしたことに起因する。

都合の良いデータを選ぶまでして、自らが是とする気象学

的季節区分の中に二十四節気を取り込もうとする日本気象協会による「日本版二十四節気」策定の試みは、この『現代俳句歳時記』と同じ誤謬を別の形でもう一度行おうとするものに他ならないのである。

### 三・三 立春と立秋

後の表3に見るように、寒い冬が終わり春の到来を告げる立春や、暑い夏が終わり秋の到来を告げる立秋は人々の認知度が高い。表2は立春、立秋前後の日本各地の気温の半旬別平年値で、太字はその最低値と最高値である。

まず二月四日頃の立春の前後を見ると、亜寒帯の札幌から亜熱帯の那覇まで、概ね一月二十六日～三十一日に気温の最低値を示す。即ち、立春の直前に最も寒い時期を迎える。

また、八月七日頃の立秋の前後を見ると、南北で多少のずれはあるが、概ね立秋の半月前頃から立秋に掛けて気温の最高値を示し、最も暑い時期を迎える。

即ち、立春はこれ以上寒くならず、これから少しずつ暖かくなる時節、立秋はこれ以上暑くならず、これから少しずつ涼しくなる時節であり、南北に長い日本列島全体に共通する指標として、現在のままで十分の意義がある。

### 三・四 シミュレーション

表2 各地の気温の半旬別平年値(℃)

注1：太字は各地の気温の半旬別平年値の最低値と最高値							
注2：立春は2月4日頃、立秋は8月7日頃							
地点		札幌	東京	大阪	広島	鹿児島	那覇
北緯		43° 4′	35° 41′	34° 41′	34° 24′	31° 33′	26° 12′
1月	16～20日	-3.8	5.9	5.9	5.2	8.4	17.0
	21～25日	-4.0	<b>5.8</b>	5.6	4.9	8.2	16.7
	26～31日	<b>-4.1</b>	<b>5.8</b>	<b>5.4</b>	<b>4.8</b>	<b>8.1</b>	<b>16.4</b>
2月	1～5日	-3.9	5.9	5.6	5.0	8.4	16.5
7月	11～15日	19.9	25.5	27.1	26.7	28.0	28.9
	16～20日	20.6	26.1	27.7	27.3	28.4	<b>29.0</b>
	21～25日	21.5	26.7	28.3	28.0	28.7	<b>29.0</b>
	26～31日	22.3	27.2	28.8	28.5	<b>28.8</b>	<b>29.0</b>
8月	1～5日	22.7	27.6	<b>29.0</b>	<b>28.7</b>	<b>28.8</b>	28.8
	6～10日	<b>22.8</b>	<b>27.7</b>	<b>29.0</b>	28.6	28.7	28.8
	11～15日	22.6	27.6	28.9	28.4	28.6	28.7
1981～2010年の平均値(『理科年表 平成24年』)							

表3は二十四節気の一覧とその認知度である。各節気の認知度は日本気象協会のホームページに記載された調査結果のグラフから読み取ったものである。

ここでは、この一覧表を元に具体的に「日本版二十四節気」のシミュレーション（模擬実験）を行い、その是非を検討してみる訳であるが、その場合、まずこれだけは満たさなければならぬ絶対条件というものがある。

- ① 春分、夏至、秋分、冬至（二至二分）は天文学的にも重要な意味を持ち、洋の東西を問わず、その重要性と認知度は高いので、変えることは出来ない。
- ② 二十四節気と言う以上、一年を二十四等分したものでなければならぬ。

日本気象協会が意図するものは、三月からを春とするなどの気象学的季節区分に二十四節気を合わせようとするものであるから、考えられる案は次の二つである。

- ① 立春、立夏、立秋、立冬（四立）の時期を約一カ月、即ち、節気二つ分あとにずらす。
- ② 立春、立夏、立秋、立冬（四立）の名称を変えて二十四節気から抹消する。また、それぞれの二つあとの節気を、新しい春夏秋冬の始まりに相応しい名称に変える。即ち、少なくとも八つの節気の名称を変える。

まず、四立を節気二つ分あとにずらす第一案は、次のようにクリアすべき問題点が山積みする。

表3 二十四節気一覧とその認知度  
 （認知度◎80%以上・△80%〜20%・×20%未満）

冬		秋			夏			春			季節														
晩冬	仲冬	初冬	晩秋	仲秋	初秋	晩夏	仲夏	初夏	晩春	仲春		初春													
◎大寒	△小寒	◎冬至	△大雪	×小雪	◎立冬	×霜降	×寒露	◎秋分	×白露	△処暑	◎立秋	△大暑	△小暑	×芒種	×立夏	×清明	◎春分	△啓蟄	×雨水	◎立春	新暦の日取(頃)	太陽黄経(度)			
一月二〇日	一月五日	十二月二二日	十二月七日	十一月二二日	十一月七日	一月二三日	一月八日	九月二三日	九月八日	八月二三日	八月七日	七月二三日	七月七日	六月二一日	六月六日	五月二一日	五月五日	四月二〇日	四月五日	三月二一日	三月六日	二月一九日	二月四日	三一一	三二五
三〇〇	二八五	二七〇	二五五	二四〇	二二五	二一〇	一九五	一八〇	一六五	一五〇	一三五	一二〇	一〇五	九〇	七五	六〇	四五	三〇	一五	〇	三四五	三三〇	三一五		

①立春（二月四日頃）が啓蟄（三月六日頃）の所に移動して現在より約三十日あとになると、立春から数える八十八夜、二百十日、二百二十日は、それぞれ「五十八夜」、「百八十日」、「百九十日」となる。

②桃の節句と言われる雛祭が立春の約三日前で、冬の行事となる。

③節分及び節分の各行事の日取は据え置くのか、立春に合わせて移動させるのか。

④土用はどうするのか。四立に合わせて約三十日ずらせば、鰻を食べる土用丑の日や梅干の土用干しなどはどうなるのか。

⑤中秋の名月、後の月（十三夜）はどうするのか。

⑥立春の十五日後に春分が来るなど、二至二分、四立を合わせた八節が一年を八等分したものでなくなる。

⑦四立の移動で空いた箇所はどのようにして埋めるのか。

⑧四立の移動先の節気である啓蟄、芒種、白露、大雪はどうするのか。

小雪、大雪などの時期は日本の季節に合っていないと言われる。また、かつて中国では啓蟄の名称が「驚蟄」と変更されたり、その時期が雨水と入れ替わったりしたことがある（文献\*4）。

こういったことなどを考慮に入れても、以上の問題点の全てを整合性を以て解決するのは至難の業である。

一方、認知度の高い立春、立秋、立冬を始め四立の全てと、それぞれの二つあとの節気、合わせて少なくとも八つの節気の名称を変更する第二案は、これらの問題の大部分を回避することが出来る。

しかし、二十四節気は太陰太陽暦には必須のものであるが、太陽暦では必ずしもそうではない。第一案や第二案のようなものをわざわざ「日本版二十四節気」と称し、現行の太陽暦に用いるくらいなら、二十四節気そのものを抹消することの方が、余程賢明な措置である。

日本気象協会は「例えば『小満』や『芒種』は、多くの日本人にとって日常生活で使う言葉ではなくなっています。」などと簡単に言う。

恐らくは、表3で×印や△印の認知度の低い節気の名称や時期などは「日本版二十四節気」策定の過程で、いとも簡単に改変されてしまうのであろう。

しかし、表3の認知度などに係わりなく、二十四節気の名称には表4のような大切な意味がそれぞれにある。

「日本版二十四節気」策定の試みは、先の「グレゴリオ暦の一月一日」で述べたような日本で一四〇〇年の歴史を持つ二十四節気を、僅か一年半の数人による数回の議論だけで変えてしまおうとするものである。

日本気象協会が安易に言う「多くの日本人」、「日常生活」などというフレーズが、大切な文化の伝統を次々と奪い去る口実とならないことを切に望むのである。

表4 二十四節気の解釈（天明七年刊『暦便覧』より、文献\*1、7）

冬		秋			夏			春			季節															
晩冬	仲冬	初冬	晩秋	仲秋	初秋	晩夏	仲夏	初夏	晩春	仲春	初春	春節														
大寒（だいかん）	小寒（しょうかん）	冬至（とうじ）	大雪（たいせつ）	小雪（しょうせつ）	立冬（りつとう）	霜降（そうこう）	寒露（かんろ）	秋分（しゅうぶん）	白露（はくろ）	処暑（しよしよ）	立秋（りつしゅう）	立秋（りつしゅう）	大暑（たいしよ）	小暑（しょうしよ）	夏至（げし）	芒種（ぼうしゆ）	小滿（しょうまん）	立夏（りつつか）	穀雨（こくう）	清明（せいめい）	春分（しゅんぶん）	啓蟄（けいちつ）	雨水（うすい）	立春（りつしゅん）	二十四節気	
十二月中	十二月節	十一月中	十一月節	十月中	十月節	九月中	九月節	八月中	八月節	七月中	七月節	六月中	六月節	五月中	五月節	四月中	四月節	三月中	三月節	二月中	二月節	正月中	正月節	十二月節	十二節月	
一月二〇日	一月五日	二月二日	二月七日	二月二日	二月七日	三月三日	三月八日	三月三日	三月八日	三月三日	三月七日	三月二日	三月七日	三月二日	三月六日	三月二日	三月五日	三月二日	三月五日	三月二日	三月六日	三月二日	三月九日	三月四日	二月四日	新暦の日取頃
ひゆることのいたりてはなはだしきときなればなり	冬至より一陽おこるがゆへに陰気にさからふゆへますく冷也	日南のかぎりを行て日のみじかきのいたりなればなり	雪いよ／＼ふりかさねる折からなればなり	ひゆるがゆへに雨もゆきとなりてくだるがゆへなり	冬の気たちそめていよ／＼ひゆればなり	つゆが陰気にむすばれて霜となりてふるゆへなり	陰寒の気にあふて露むすびこらんとすればなり	陰陽の中分なればなり	陰気やうやくかさなりて露こごりて白色となればなり	陰気とどまりて初てしりぞき処とすればなり	はじめて秋の気たつがゆへなればなり	暑気いたりつまりたる時節なればなり	大暑来れるまへなればなり	陽ねつ至極し、又日の長きのいたりなるをもつてなり	芒ある穀るい稼種する時なればなり	万物盈満すれば草木枝葉しげる	なつのたつがゆへなり	春雨ふりて百穀を生化すればなり	万物はつして清浄明潔なればこの芽は何の草としるる	日天の中を行て昼夜とうぶんの時なり	陽気地中にうごき、ちどまる虫あなをひらき出ればなり	陽気地上にはつし雪氷とけて雨水となればなり	はるの気たつをもつてなり	はるの気たつをもつてなり	二十四節気	二十四節気

参考文献（歳時記は「主要歳時記一覧」参照）

- \* 1 『季節の366日話題事典』倉嶋厚著、二〇〇二年、東京堂出版
- \* 2 「日本気象協会」ホームページ―「トピックス」―  
「11・02・22 日本版二十四節気」、「11・12・09  
『日本版二十四節気 専門委員会』第1回を開催しま  
した」
- \* 3 『日本の歳時記別冊・俳句への扉』小学館編、二〇一  
二年、小学館
- \* 4 『アジアの暦』岡田芳朗著、二〇〇二年、大修館書店
- \* 5 「[www.ourathet.com](http://www.ourathet.com)」―「四庫全書―史部―正史類―  
後漢書―志第三・律曆下」
- \* 6 『理科年表・平成24年』国立天文台編、二〇一一年、  
丸善
- \* 7 『暦と時の事典』内田正男著、一九八六年、雄山閣

# 各地の春夏秋冬

## 第一節 東京と京都

歳時記は、かつては京都、現在は東京を基準地として作成しているとされる。北は亜寒帯の北海道から南は亜熱帯の沖縄まで南北に長い日本では、各地でその気候や風土に様々の相違がある。また、俳句の風土は日本だけでなく、広く世界各地に及んでいる。

本稿では、①東京と京都、②北海道、③旧満州国、④沖縄、⑤ブラジル、の順に、各地の春夏秋冬について簡単な考察を行ってみることにする。

まず、現行の歳時記の基準地とされる東京と、かつての基準地とされる京都では、気温始め気象データにどの程度の差があるのか見てみよう。

表1は『理科年表・平成24年』により、東京と京都の主な気象データを比較したものである。その特徴を挙げると次の通りである。

- ① 東京と京都で緯度、標高に大きな違いはない。
- ② 京都は大陸性気候に準ずる盆地性の気候で、海洋性

表1 東京と京都の気象データの平年値

気温の平年値 (°C)		気温以外の平年値		東京	京都
地点	東京	京都	降水量 (mm/年)	1 5 3 0	1 4 9 0
北緯	35° 41'	35° 1'	霧日数 (日/年)	3	1
標高	6 m	41 m	雷日数 (日/年)	1 3	2 0
1月	6.1	4.6	霜の初日	1 2 月 2 0 日	1 1 月 1 8 日
2月	6.5	5.1	霜の終日	2 月 2 0 日	4 月 6 日
3月	9.4	8.4	雪日数 (日/年)	1 0	3 0
4月	1 4. 6	1 4. 2	雪の初日	1 月 3 日	1 2 月 1 5 日
5月	1 8. 9	1 9. 0	雪の終日	3 月 1 1 日	3 月 2 0 日
6月	2 2. 1	2 3. 0	梅の開花日	1 月 2 6 日	2 月 2 0 日
7月	2 5. 8	2 6. 8	タンポポの開花日		2 月 2 8 日
8月	2 7. 4	2 8. 2	染井吉野の開花日	3 月 2 6 日	3 月 2 8 日
9月	2 3. 8	2 4. 1	鶯の初鳴日	3 月 6 日	3 月 1 日
10月	1 8. 5	1 7. 8	燕の初見日	4 月 7 日	3 月 2 6 日
11月	1 3. 3	1 2. 1	紋白蝶の初見日		3 月 2 6 日
12月	8. 7	7. 0	蛍の初見日		6 月 2 日
年	1 6. 3	1 5. 9	油蟬の初鳴日	7 月 2 4 日	7 月 1 7 日
注1：1981～2010年の平均値（『理科年表・平成24年』）					
注2：生物季節の空欄は、現象が現れない年が多かったりしたために平年値を求めなかった場合である。					

気候の東京に比べて、やや夏暑く冬寒い傾向にあるが、気温の年平均及び年変化に大きな違いはない。

③年間の降水量に大きな違いはない。

④年間の霧日数はどちらも少ない。東京に近い横浜が八日、銚子が四四日、京都に近い同じ盆地性の奈良が九日と多いことを考えると、これは都市化などによるものかも知れない。

⑤年間の雷日数は京都の方がだいぶ多い。

⑥京都の初霜は東京より一カ月早い十一月中旬、霜の終日は一カ月半遅い四月上旬である。

⑦京都の年間の雪日数は東京の三倍で、雪の降る期間も十二月中旬から三月下旬までと東京より長い。

⑧京都の梅の開花日は東京より一カ月近く遅い。

⑨桜の開花日始め、それ以外の主な生物季節は大きく違わないが、東京のタンポポや、紋白蝶、蛍のデータが空欄になっていることから分かるように、東京の都心では、だいぶ自然が失われて来ている。

勿論、これらは平均的な気象データを述べたものに過ぎない。更に、最高気温や最低気温、時雨や夕立など雨の降り方に至るまで事細かに見て行くと、東京と京都の様々な興味深い相違が出て来ると思われる。

## 第二節 北海道

表2は札幌と東京の気温を比較したものである。東京より緯度にして約七度北にある亜寒帯の札幌は、温帯の東京と較べてこれだけの違いがある。札幌市教育委員会編『札幌歳時記』は季題「春」の解説で次のように書く。

春というのは一体いつからなのか。北海道のような特異な気候風土では、実際の生活感覚では暦法だけに因ることのできないものがある。事象的には木の芽がでて花が開き蝶がでて舞うといった季節で、気象学的の3、4、5月の頃、いわゆる西高東低の気圧配置がくずれて来る時季を現代人は春と感じている。

表2 気温の月別平年値

地点	札幌(℃)	東京(℃)
北緯	43° 4′	35° 41′
標高	17 m	6 m
1月	-3.6	6.1
2月	-3.1	6.5
3月	0.6	9.4
4月	7.1	14.6
5月	12.4	18.9
6月	16.7	22.1
7月	20.5	25.8
8月	22.3	27.4
9月	18.1	23.8
10月	11.8	18.5
11月	4.9	13.3
12月	-0.9	8.7
年	8.9	16.3
1981~2010年の平均値 (『理科年表・平成24年』)		

同歳時記は、その他の記述などを総合すると、次のように季節区分を設定している。

①春は三月中旬から五月まで。

②夏は六月から八月上旬まで。



③秋は、夏と秋の境界とされる萩の開花と蟋蟀こおろぎの初鳴きの時期に合わせ、八月中旬から十月中旬まで。

④冬は十月下旬から翌年三月上旬まで。

因みに、気象庁札幌管区気象台による生物季節観測平年値（文献\*3）で、山萩の開花は函館で八月五日、釧路で八月十二日、エンマコオロギの初鳴きの記載はない。

また、永田耕一郎『北ぐに歳時記』は北海道の「春」と「冬」について、それぞれ次のように記している。

それにしては北海道の二月は極寒のさなかである。立春といつても春の息吹を感じとる人はだれもないだろう。

しかし、日本人には季節を先取りする性格があるのかも知れない。冬のうちから「春遠からず」といつて、ひたすら春の到来を待ち望む気持ち強い。

立春とは心を優先させた季の言葉である。色で言えば黄色の輝く春という季節の立つ日を北国の三月に探ることも楽しいことだと思う。（「春」）

石狩平野の山々にいち早く雪が積もり、まず初冬の静けさの幕が開く。やがて街の中にも雪がちらつき始め、出勤を急ぐサラリーマンの群れが、重なるようにして路上にひしめく。こういう景に出会うと、いよいよ冬の足音が慌ただしく追いかけてきたと思う。

北ぐにの冬は厳しいから、男性的な季節といえるかもしれない。春夏、夏秋と混在の季節を経て、明確な

自立の季節を冬の中に持つことができた。「山河はや冬かがやきて位に即けり 飯田龍太」という句のごとく、北ぐにの人々は雄々しく生きてゆく。（「冬」）

札幌管区気象台の平年値（文献\*5）によれば、札幌市の手稲山（標高一〇二四m）の初冠雪は十月十六日、札幌の初雪は十月二十八日、初積雪は十一月八日である。『北ぐに歳時記』の「冬」の記述は、先の『札幌歳時記』で冬の始まりを十月下旬としていることにほぼ合致する。

### 第三節 旧満州国

中国東北部にあった旧満州国は、緯度の上から見ると北緯五四度から北緯三九度、北は樺太の北端から南は日本の秋田県や岩手県辺りに相当している。

満鉄（南満州鉄道株式会社）弘報課に關係した文人、金丸精哉は『満州歳時記』の「満州の季について」で、新京（現在の長春）と公主嶺の間を東西に横切る分水嶺、緯度で言えば北緯四三度四〇分、日本の旭川くらいに相当する分界線を以て満州を南北に分け、それぞれの季節区分を次のように設定している。

即ち、南満州は日本の季節区分を踏襲して、二月・三月・四月を春、五月・六月・七月を夏などとし、北満州は四月から九月までの二カ月ずつ、四月・五月を春、六月・七月を夏、八月・九月を秋とし、あとの十月から三月まで

の六ヵ月間を冬とした。

金丸精哉が元にしたデータは『満州歳時記』付録にある康徳八年（昭和十六、一九四一）の『満州国時憲書』（満州国中央観象台編）などである。康徳は溥儀が即位した昭和九年（一九三四）を元年とする満州国帝政期の元号で、満州国中央観象台は日本の中央気象台に当たる。

表3は、その康徳八年の『満州国時憲書』より抜粋した北満州の哈爾濱、南満州の大連の気温と、同年の『理科年表』による札幌の気温を比較したものである。

表3 気温の月別平年値(℃)

地点	哈爾濱	大連	札幌
北緯	45° 45′	38° 54′	43° 4′
標高	145 m	96 m	17 m
1月	-21.5	-5.2	-6.2
2月	-16.3	-3.5	-5.2
3月	-5.0	1.9	-1.6
4月	6.3	9.4	5.2
5月	13.5	15.4	10.4
6月	19.5	20.2	15.0
7月	23.4	23.6	19.5
8月	21.8	24.5	21.2
9月	14.8	19.9	16.5
10月	6.1	13.8	10.0
11月	-6.3	5.2	3.3
12月	-17.2	-1.9	-3.2
年	3.2	10.3	7.1
哈爾濱・大連：『満州国時憲書 康徳8年』（昭和16、1941） 札幌：『理科年表・昭和16年』			

これを見ると、遼東半島の南端に位置する南満州の大連は札幌よりだいぶ南、日本の岩手・宮城県境に相当する

緯度で、札幌と同じ海洋性気候であり、札幌より年平均で約3℃暖かい。

また、北満州の哈爾濱は札幌より北の緯度で、札幌とは異なる大陸性気候であるため、夏は札幌より暑いくらいであるが、秋から冬に掛けての気温の低下は著しく、冬の寒さは札幌とは比べ物にならない程の厳しさである。

したがって、金丸精哉が設定した季節区分は概ね妥当なものであるが、彼自身が指摘するように、広大で、しかも大陸性気候と海洋性気候の地域とが混在する満州の季節を南北の二分割のみで論じることには無理がある。

しかし、満州の季節区分を詳細に論じることが本稿の目的ではないので、これ以上の論は行わない。

西田もとつぐなど（文献\*8、9、10）によれば、大連には大正年代の「アカシヤ」、昭和四年創刊の「平原」、昭和十六年創刊の「鶉」（大同団結と思想統制の組織、関東州俳句協会機関誌）があり、哈爾濱には昭和十四年創刊の「韃靼」があるなど、満州各地に俳句会があった。

また、桂樟蹊子は昭和十二年から十六年まで、高屋窓秋は昭和十三年から二十一年まで新京に在任した。

樟蹊子は昭和十二年に京都大学農学部を卒業後、満州国政府実業部に赴任し、各地の風情を見て回った。満州では「韃靼」の連作欄選者となり、引き上げ後に句集『放射路』、後年には回想録（文献\*11）を出している。

窓秋は昭和十三年に結婚後、満州電信電話株式会社に入

社、終戦まで勤務し、職場の句会で句を作った。昭和十五年には憲兵に「京大俳句」との関係などを聞かれる。昭和十八年には内地の文学報国会俳句部会に当たる満州俳句協会設立に参加、機関誌「俳句満州」の責任者となったが、一句も一文も発表することはなかったという（文献\*12）。そして、河東碧梧桐（大正十二年、昭和三年）、高浜虚子（大正十三年、昭和四年）の訪満（文献\*13）、満州への出張旅行の体験による山口誓子の第二句集「黄旗」（昭和十年刊）など、満州と俳句との話題は尽きないが、これ以上のことは本稿の範囲を超えるので省略する。

#### 第四節 沖繩

小熊一人『沖繩俳句歳時記』、瀬底月城『沖繩・奄美南島俳句歳時記』は「沖繩の季節区分」として次のようなものを巻頭に掲げ、季節は季節別ではなく、月別に配列し、解説している。

真冬	一月 二日	二月 二三日
早春	二月 二四日	三月 一四日
春の荒れ	三月 一五日	四月 七日
陽春	四月 八日	五月 一日
梅雨	五月 一二日	六月 二五日
真夏	六月 二六日	九月 五日
残暑	九月 六日	一〇月 七日

秋	一〇月 八日	一〇月 三一日
晩秋	十一月 一日	十二月 一日
冬	十二月 二日	一月 一日

これを見ると、春、秋、冬の期間はおよそ見当が付くが、夏の始まりが分からないので、原典の北村伸治「沖繩の産業気象暦」（「測候時報」昭和四十七年三月号、気象庁）を参照する。北村伸治は俳誌「人」同人で、石垣島地方気象台長を務めた人である。

同文献の「4月8日 陽春の入り」の「衣がえ」に「5月1日は沖繩の衣がえに当たり制服は夏物にかえられる。この日は日中夏のような高温晴天となること」が近年多い」とある。

この夏の季節「更衣」に着目して五月一日を夏の始まりとすれば、沖繩の季節区分は月次割でおおよそ次のようになる。

- ① 春は三月～四月（二月二十四日～四月三十日）
- ② 夏は五月～八月（五月一日～九月五日）
- ③ 秋は九月～十一月（九月六日～十二月一日）
- ④ 冬は十二月～二月（十二月二日～二月二十三日）

表4は、沖繩の那覇と鹿児島、東京の気温を比較したものである。これを見ると、緯度にして鹿児島より約五度、東京からは十度南にある亜熱帯の地、那覇は気温の最高値は鹿児島、東京とほぼ同じで真夏の暑さは余り変わらないが、東京と鹿児島は気温の最高値と最低値の差が約二十℃

であるのに対して、那覇は十二℃と気温の低下が少なく、一年を通して東京、鹿児島より遙かに暖かい。

表4 気温の月別平年値(℃)

地点	東京	鹿児島	那覇
北緯	35° 41′	31° 33′	26° 12′
標高	6 m	4 m	28 m
1月	6.1	8.5	17.0
2月	6.5	9.8	17.1
3月	9.4	12.5	18.9
4月	14.6	16.9	21.4
5月	18.9	20.8	24.0
6月	22.1	24.0	26.8
7月	25.8	28.1	28.9
8月	27.4	28.5	28.7
9月	23.8	26.1	27.6
10月	18.5	21.2	25.2
11月	13.3	15.9	22.1
12月	8.7	10.6	18.7
年	16.3	18.6	23.1
1981～2010年の平均値 (『理科年表・平成24年』)			

先の沖縄の月次割の季節に各月の気温を当て嵌めると、春は一九〇二℃、夏は二四〇二九℃、秋は二八〇二二℃、冬は一九〇一七℃ということになる。

秋の気温がやや高い気もするが、先の北村伸治「沖縄の産業気象暦」によれば、九月中頃には熱帯夜も終わり、湿度がぐっと下がって爽やかな秋晴となり、初北風「ミーニシ」(新北)が吹き、日中は気温が高いが、夜間は毛布なしでは寒いくらいであるという。

一方、冒頭に挙げた二つの歳時記は「新北風」を十月の季節としてしているから、九月は夏と秋が混在する時節なので

あろう。

また、亜熱帯の沖縄に冬があるのは不思議に思うかも知れないが、十二月には初寒波が来襲すると言い、「冬至寒」(トウンジービーサー)、「鬼餅寒」(ムーチャービーサー)、大寒の頃の寒さ」という季節がある。

『理科年表・平成24年』によれば、那覇の日最低気温の月別平年値は十二月、三月が一六℃台、一月、二月が一四℃台である。北村伸治「沖縄の産業気象暦」によれば、沖縄に来て二年もすると沖縄の気候に慣れて、一八℃でやや寒い、一六℃で寒い、一四℃でかなり寒いとの体感になるという。

東京から沖縄の気象台に転勤し三年間を過ごした小熊一人は『沖縄俳句歳時記』の「はじめに」で次のように書いている。

当初、作句はすべて夏の季感でと決めたものだったが、住みなれると、亜熱帯海洋性気候の美しい自然、素朴な行事・風習のなかに季節の微妙な変化があると  
思った。

沖縄に住む人だけが知る喜びや独特な季語の多くあることを知った。

## 第五節 ブラジル

ブラジル日系移民の俳句は、皇国殖民会社代理人として

第一回の輸送を監督した上塚周平（俳号、瓢骨）が、明治四十一年（一九〇八）六月十八日、移民船の笠戸丸でサンパウロ州のサントス港に着岸した際に詠んだ句、

サントスの山に瀧あり

瀧瀧を見上げて着きぬ渡伯船 上塚瓢骨

に始まるとされる（文献\*17、18）。

瓢骨に続いて、昭和の初めに相次いで移民となった同じホトトギス派の木村圭石、佐藤念腹のことは「ホトトギス雑詠の無季句（海外編）」（「新歳時記通信」第五号）で少し紹介したが、これらブラジル俳句草創期の詳細については、文献\*17、23を参照されたい。その中で、文献\*23はラジカルなブラジル俳句論としても興味深い。

ブラジルの気候は熱帯から亜熱帯、温帯的の気候が土地によってあるのでありますが、日本の如く春夏秋冬の判然した区別がなく大体雨期と乾燥期に分れて居り、日本の如き鋭い季感はありません。（宮坂幾別春「ブラジルの俳句」「ホトトギス」昭和二十七年十月号）

四季がないと言われる亜熱帯のブラジルにも、三年五年と住みつくに従って、日本程規則正しいものでは元よりないけれど、矢張春夏秋冬の移り変りのあるのを知る。四季の移り変りに敏感な日本人が、此現象を黙って見て居る訳がない。そこに俳句が作られる。

（佐藤念腹『木蔭雑詠選集』「あとがき」）

これらはブラジルのホトトギス派俳人がブラジルの季節について述べたものであるが、ブラジルの歳時記としては梶本北民『ブラジル季寄せ』（一九八一年刊）、佐藤牛童子『ブラジル歳時記』（二〇〇六年刊）などがある。

両歳時記とも、ブラジルの四季は首都ブラジリアを基準として、夏は十二月二十一日（夏至）より秋分の三月二十一日まで、等々になっているとした上で、「作句上の四季区分」は二十四節気に基づき、サンパウロ市を基準に次のようになっているとする。

- ①夏は十一月、十二月、一月（立夏は十一月八日頃）
- ②秋は二月、三月、四月（立秋は二月五日頃）
- ③冬は五月、六月、七月（立冬は五月六日頃）
- ④春は八月、九月、十月（立春は八月八日頃）

そして、季題の配列は四季を追い、年始の部（夏）を巻頭に、秋、冬、春、夏の順としている。

このように、サンパウロ市は日本とは地球の反対側の南半球に位置しているから、春と秋、夏と冬、全てが日本とは逆になっている。

表5はサンパウロと那覇、東京の気温を比較したものである。サンパウロは勿論、東京よりはずっと暖かく、気温の変化も少ない。

また、那覇との比較では、緯度からすればサンパウロは那覇より少し赤道に近いが、標高が高い。最低気温は那覇と余り変わらないが、最高気温が六℃近く低く、過ごし易

い気候である。

一年を通じて気温の変化は少ないが、先の念腹が言うように四季の移り変わりがあり、日本と同様の二十四節気による季節変化を感受することが出来るのであろう。

表5 気温の月別平年値(℃)  
(サンパウロの緯度は南緯)

地点	サンパウロ	那覇	東京
緯度	23° 30′	26° 12′	35° 41′
標高	792 m	28 m	6 m
1月	22.8	17.0	6.1
2月	23.2	17.1	6.5
3月	22.4	18.9	9.4
4月	20.8	21.4	14.6
5月	18.3	24.0	18.9
6月	17.0	26.8	22.1
7月	16.5	28.9	25.8
8月	17.8	28.7	27.4
9月	18.3	27.6	23.8
10月	19.9	25.2	18.5
11月	21.3	22.1	13.3
12月	22.1	18.7	8.7
年	20.0	23.1	16.3
1981～2010年の平均値 (『理科年表・平成24年』)			

次は先の『ブラジル歳時記』の編集協力者で、同書入手仲介の労を取って下さった日毎叢書企画出版の前園博子よりのメールの一節である。これにより、常夏と思われたブラジルのサンパウロにも冬の到来のあることが分かる。

こちらは昨日までは冷え込みが厳しくカイロなどあてて仕事をしておりましたが、今朝は気温が五度くらい上がったに違いありません。わりと快適な一日にな

りそうです。今度の日曜日は国土館農場で桜まつりが開催されます。この寒さで七分咲きとのことですが、日曜日には満開になってくれればいいのですがね。  
(七月一日付)

最近の冷え込みは異常でしたが、きょうはちよつとだけ気温が上がリ、いつもより一枚羽織るものが少なくなりました。(七月十四日付)

ネット検索によれば、サンパウロの桜祭は例年七月から八月に掛けて各地で行われ、桜の種類は沖繩桜(寒緋桜)を中心にヒマラヤ桜、雪割桜などであるという。

面白いことに、先の二つの歳時記には「桜」が春の季題としてあるが、「花冷」は季題にない。日本よりは大方早く冬の終わりの月、表5によれば一年で最も寒い月、七月から咲く桜であれば、「花冷」は冬の寒さの中に取り込まれてしまうのであろう。

また、その一方で、「大寒」が季題にない。ブラジルの歳時記は日本と体裁は似ているようでも、詳細に見て行くと、やはり様々の相違があるようである。

参考文献(歳時記は「主要歳時記一覧」参照)

\*1 『理科年表・平成24年』国立天文台編、二〇一一年、丸善

\*2 『札幌歳時記』札幌市教育委員会編、一九八四年、札幌

幌市・札幌市教育委員会

\* 3 ネットサイト「気象庁札幌管区气象台」―「過去データ・統計資料など」―「生物季節」

\* 4 『北ぐに歳時記』永田耕一郎著、一九八四年、北海道新聞社

\* 5 ネットサイト「気象庁札幌管区气象台」―「過去データ・統計資料など」―「北海道の統計データ」

\* 6 『満州歳時記』金丸精哉著、一九四三年、博文館

\* 7 『理科年表・昭和16年』東京帝国大学東京天文台編、一九四〇年、丸善

\* 8 「キメラの国の俳句―中国東北部（旧満州国）俳句史序論―」西田もとつぐ、「俳句文学館紀要」第九号、一九九六年、俳人協会

\* 9 「モダニズム俳句の系譜―続中国東北部（旧満州国）俳句史」西田もとつぐ、「俳句史研究」第十三号、二〇〇五年、大阪俳句史研究会

\* 10 「俳句文学館俳誌目録」一九九九年、俳人協会

\* 11 『夕陽の放射路―追憶の満洲』桂樟蹊子著、一九八一年、毎日新聞社

\* 12 『富澤赤黄男 高屋窓秋 渡邊白泉集』現代俳句の世界16、一九八五年、朝日文庫

\* 13 『高浜虚子・河東碧梧桐集』明治文学全集56、一九六七年、筑摩書房

\* 14 『沖繩俳句歳時記』小熊一人著、一九七九年、琉球新

報社

\* 15 『沖繩・奄美南島俳句歳時記』瀬底月城著・発行、一九九五年

\* 16 『沖繩の産業気象暦』北村伸治、「測候時報」第三十九卷第三号、一九七二年三月、気象庁

\* 17 ネットサイト「ブラジル移民の百年」―「コラム」―「ブラジル日本移民と俳句」

\* 18 『ブラジル移民の父 上塚周平』竹崎八十雄、一九四〇年、ネットサイト「ブラジル移民文庫」―「上塚周平（瓢骨）の俳句」に「俳人瓢骨」の章を所収

\* 19 『念腹句集』佐藤念腹著、一九五三年、暮しの手帳社、ネットサイト「ブラジル移民文庫」所収

\* 20 『念腹句集第二』佐藤念腹著、一九六一年、暮しの手帖社、ネットサイト「ブラジル移民文庫」所収

\* 21 『ブラジルの俳句』宮坂幾別春、「ホトトギス」、一九五二年十月

\* 22 『木蔭雑詠選集』佐藤念腹選、一九七九年、永田書房

\* 23 『執着のベクトル―移民の俳句について』外山一機、ネットサイト「詩客 SHIKAKU」―「俳句時評 第15回」、二〇一一年八月十九日

\* 24 『ブラジル季寄せ』梶本北民編、一九八一年、日伯毎日新聞社、ネットサイト「ブラジル移民文庫」抄録

\* 25 『ブラジル歳時記』佐藤牛童子編著・発行、二〇〇六年

## 春夏秋冬の傍題（検証編）

### 第一節 はじめに

「春」、「夏」、「秋」、「冬」の傍題は『図説俳句大歳時記』、『角川俳句大歳時記』、『カラー図説日本大歳時記』、『カラー版新日本大歳時記』など大歳時記を中心に、多くの語が収録されている。

それらの中には、近世歳時記に掲載の語を正誤や語意の検証もなく、未整理のままに採録しているものがある。

また、これらの傍題を用いた例句の掲載は数少なく、傍題掲載のあり方も問われている。

まず、この「検証編」では、大歳時記に掲載された「春夏秋冬」傍題の全てについて一通りの検証を行う。

これら傍題のほとんどは漢語である。漢語とは「和語に對して漢字の字音による語。また、漢字の熟語。もともと中国で用いられていたものを日本語の中に借用したもの、和語に漢字をあてて音読したもの、日本で作られたものなど。」（『日本国語大辞典』）である。

したがって、検証に用いる辞書、文献類は次のものなど

とした。

#### A 日本語辞書

- ① 『大漢和辞典』（『大漢和』と略記）
- ② 『日本国語大辞典』（『国語大』と略記）
- ③ 『大辞泉』・『字通』・『日本大百科全書』  
②、③はウェブ版で、文献\*3のサイトで一括検索）

#### B 中国語古典文献データベース及び辞書

- ① 中央研究院・漢籍電子文献（『漢籍DB』と略記）
  - ② 故宮博物院・寒泉（『寒泉DB』と略記）
  - ③ 新詩改罷自長吟・全唐詩検索系統（『全唐詩DB』と略記）
  - ④ [www.ourathet.com](http://www.ourathet.com)（『四庫全書』などのデジタル化を推進するサイト、『四庫DB』と略記）
  - ⑤ 『中国哲学書電子化計画』（中国古代哲学書及びその相関的原典の電子化、『哲学DB』と略記）
  - ⑥ 『漢典』（オンライン漢文字典）
  - ⑦ 『百度百科』（オンライン百科事典）
- （中国語簡体字は中国語変換サイトで日本語漢字に変換）
- 本稿では、まず「春夏秋冬」傍題と係わりの深い「五行説」の簡単な解説、問題点修正後の傍題の分類整理と語意の解説を行った上で、末尾に検証による傍題の問題点と修正の経緯について述べることにする。
- 煩瑣な検証は退屈な内容である。必要に応じて参照していただければ幸甚である。



第二節 五行説

「春夏秋冬」の傍題には五行説由来のものが多い。五行説は紀元前四、五世紀頃、中国の戦国時代に齊の鄒衍が唱えた学説で、おおよそ次のようなものである。

天地間のすべては木火土金水の五つの要素でできている。その消長、盛衰によって自然界、人間社会の諸現象が定まるといふ、たとえば夏は火の要素が強くなるから暑く、秋は金の気が強くなるから冷えてくるという類いの素朴な理論である。『暦と時の事典』

そして、五行説によって何でも五つに分類することが行われた。表1はその一部、「春夏秋冬」の傍題に係わりのあるものの一覧である。

表1 五行配当表（文献\*5）

五行	木	火	土	金	水
五星	歳星 (木星)	熒惑 (火星)	鎮星 (土星)	太白 (金星)	辰星 (水星)
五色	青	赤(朱)	黄	白(素)	黒(玄)
五時	春	夏	土用	秋	冬
五音	角	徵	宮	商	羽
五方	東	南	中央	西	北

表2 「春夏秋冬」の傍題（括弧内は関連語）

D		C		B		A	
季節の期間に係わるもの		季節の特徴に係わるもの		帝・神の名に係わるもの		五行説に係わるもの	
九春	三春	春(春方)	(発生)	東帝・東君	帝・神の名に係わるもの	五行	五時
九夏	三夏	陽春	長贏	祝融	赤帝	青陽	春
九秋	三秋	芳春	收成	西顛	白帝	朱明	夏
九冬	三冬	蒸炊・農節	凛秋	少皞(少昊)	黒帝・玄冥	朱炎	秋
		朗景・明景	安寧	顛頊・冬帝	玄帝	素秋・素商	冬
		(冬場)	嚴冬・律檀			白蔵	
						朱律	
						白秋	
						商秋	
						西候	
						羽音(羽音)	
						玄冬	
						女英(元英)	
						金秋・金商	
						升明	

### 第三節 傍題の分類整理

表2は問題点修正後の「春夏秋冬」傍題を五行説との係わりで分類整理し、一覧表にしたものである。以下、それぞれについて、中国文献の有無も含め、検証を行う。『大漢和』に記載のあるものは、中国由来の語であることは明白であるため、多くの場合その用例を省略した。

#### A 五行説に係わるもの

(一) 五行く「升明」(夏)、「静順」(冬)

「升明」、「静順」

— 『大漢和』「升明」なし。「静順」なし。

— 『国語大』「升明」夏の異称。「静順」冬の異称。

『滑稽雑談』の「静順」に「素問」と記載があり、中国の古典医学書『黄帝内经素問』(黄帝とその臣の名医岐伯との問答体で書かれている)の「五常政大論篇第七十」に次の一節がある(文献\*6)。

黄帝問曰、大虚寥廓、五运廻薄、衰盛不同、損益相從、願聞平氣、何如而名、何如而紀也。

岐伯対曰、昭乎哉問也、木曰敷和、火曰升明、土曰備

化、金曰審平、水曰静順。

当該箇所現代語訳と注釈は次の通りである。

「火曰升明」火の氣であれば、『升明』と称し、明るく物を生育させる氣が現われて、万物を繁茂させます。「升明」升は上昇すること、明は輝きのこと。光を發して上昇の勢いをもつのが火の氣の正常な働きである。「水曰静順」水であれば、『静順』と称し、静寂で柔順な氣を現わし、万物を潜伏させます。「静順」水の氣の性質は、正常な状態の下では、静か

で柔順であるということを指している。  
— 『百度百科』「升明」運氣術語。「静順」平静和順、貞静温順。

— 『漢典』「升明」なし。「静順」平静和順、貞静温順。

(二) 五行く「金秋」・「金商」(秋)

「金秋」・「金商」

— 『大漢和』「金秋」なし。「金商」なし。

— 『国語大』「金秋」秋の異称。「金商」秋の異称。

〔錢起、九日登玉山〕龍沙伝往事、菊酒対金秋。  
〔全唐詩〕卷二二七)

「九日」陰曆九月九日、重陽。「玉山」陝西省藍田県東南の山、藍田山。「龍沙」古代西部北部の辺塞地区を指す(文献\*7)。

〔李义、餞許州宋司馬赴任〕地惨金商節、人康璧仮

田。『全唐詩』卷九二)

「餞」送行の宴。「許州」州名、現在の河南省許昌  
県。

(三) 五色く「青陽」(春)、「朱明」(夏)、「白蔵」(秋)、

「玄英」(冬)

「青陽」、「朱明」、「白蔵」、「玄英」の出典は『爾雅』  
(中国最古の字書)で、次の引用の括弧内は『爾雅注疏』  
〔爾雅〕の注釈書)による。

〔爾雅、釈天〕春為青陽、(氣清而温陽。)夏為朱明、  
(氣赤而光明。)秋為白蔵、(氣白而収蔵。)冬為玄英。

(氣黒而清英。)(文献\*8、9)

『大漢和』、『国語大』では、『爾雅注疏』の注釈も反映  
して、それぞれ次のように解説されている。「青陽」で、  
『国語大』が『大漢和』より語意が広く、用法も多少異なる  
のが興味深い。

「青陽」

― 『大漢和』春をいう。氣青く温陽なところからいう。

― 『国語大』①春の異称。初春にいう場合が多い。②春  
の光。春の陽光。③春の景色。春のながめ。

「朱明」

― 『大漢和』夏の異名。氣が赤くかがやくからいう。

― 『国語大』(氣が赤く光が明らかな季節の意)夏の異

称。

「白蔵」

― 『大漢和』秋の異名。秋は、五色では白にあたり、収  
蔵の時であるからいう。

― 『国語大』秋の異称。

「玄英」

― 『大漢和』冬の異名。

― 『国語大』冬の異称。元英。(「元英」は『大漢和』  
にも「冬の異名。」として記載がある。)

(四) 五色く「青春」(春)、

「朱夏」・「朱炎」・「朱律」(夏)、

「素秋」・「素商」・「白秋」(秋)、

「玄冬」(冬)

「青春」

― 『大漢和』春をいう。春は東方で、其の色は青。

― 『国語大』春の季節。

「朱夏」

― 『大漢和』夏をいう。

― 『国語大』夏の異称。

「朱炎」・「朱律」

― 『大漢和』「朱炎」日。太陽。「朱律」なし。

― 『国語大』「朱炎」①太陽の異称。②夏の異称。「朱  
律」夏の異称。出典は何れも『和爾雅』(中国の

『爾雅』にならった国語辞書)、『滑稽雑談』で、中国文献の記載はない。

—『漢典』「朱炎」太陽、烈日。「朱律」指夏季。

〔王勃、為人與蜀城父老書〕方今白藏紹序、朱律謝期。

天高而林野疏、候肅而江山靜。(文献\*10)

「朱炎」、「朱律」は何れも中国由来であるが、「朱炎」を「夏の異称」とするのは日本だけのようである。

「素秋」

—『大漢和』秋をいう。秋は五色の白に配するからいう。

—『国語大』秋の異称。

〔李白、遊敬亭寄崔侍御〕登高素秋月、下望青山郭。

〔『全唐詩』卷一七三〕

(「敬亭に遊び、崔侍御に寄す」高きに登る素秋の月、下に望む青山の郭。)

「敬亭」敬亭山。「崔」崔宗之。李白の詩酒の友。

「侍御」官名。「郭」城郭。(文献\*11)

「素商」

—『大漢和』なし。

—『国語大』秋の異称。

〔陸敬、遊隋故都〕茲辰素商節、灰管變星躔。(『全唐詩』卷三三)

「故都」古い都。「茲辰」このとき。「灰管」古代の

中国で、樂器の律管に葭灰(葭の灰)を入れておき、

その変化で氣候を測定したもの。「星躔」星の宿り。

「白秋」

—『大漢和』なし。

—『国語大』秋の異称。用例に中国文献なし。

〔白居易、秋寄微之十二韻〕淡白秋來日、疏涼雨後

風。(『全唐詩』卷四四七)

(「秋、微之に寄す十二韻」淡白なり秋來の日、疏涼なり雨後の風。)

「微之」越州刺史元稹(字は微之)。「疏涼」すず

しいこと。(文献\*12)

この詩は「白」、「秋」の字が続いて並んでいるだけで、「白秋」を熟語として用いているのではない。

また、同じく『全唐詩DB』で検索した次の四詩の一節

も同様である。

〔王涯、平戎辞〕太白秋高助發兵。(卷三四六)

〔柳宗元、與崔策登西山〕露白秋江曉。(卷三五二)

〔韓偓、秋村〕荻園葉白秋日明。(卷六八二)

〔李中、宿韋校書幽居〕園林月白秋霖歇。(卷七四九)

『漢典』には「白秋」の語はない。また、『哲学DB』(哲学書だけでなく広範囲に文献を集録)にも『全唐詩』以外に「白秋」の語は見当たらない。

勿論、これだけでは判断出来ないが、「白秋」は中国由来の語でなく、和製の漢語ではないかと思われる。

「玄冬」

— 『大漢和』ふゆ。五行説で冬は北方、即ち水にあたり、水の色は黒いからいう。

— 『国語大』冬の異称。

(五) 五音く「商秋」(秋)、「羽音」(冬)

「商秋」

— 『大漢和』秋をいう。

— 『国語大』秋の異称。

「羽音」

— 『大漢和』五音の一。(「羽音」)

— 『国語大』冬の異称。(「羽音」)

近世歳時記の表記では「羽音」とするもの、「羽音」とするもの、両方がある。『華実年浪草』の記載から『礼記・月令』(文献\*13)を参照すると次の一節がある。

『礼記』は古代中国の経書で五経の一つ、周末から秦、漢にかけての諸儒の古礼に関する諸説を整理編集したものの『月令』はその一篇で、月々に行なわれる政事や儀式などを記録したものである。

孟冬之月、其音羽、律中应钟。仲冬之月、其音羽、

律中黄钟。季冬之月、其音羽、律中大吕。

「其音羽、律中应钟。」は「其の音は羽、律は应钟に中る。」で、以下同様である。「音」は「楽音」。「律」は

「音调(十二律)」。「应钟」、「黄钟」、「大吕」は十二律の

一、六律六吕の基本となる音で、それぞれ陰暦十月、十一月、十二月に配す。

(六) 五方く「西候」(秋)

「西候」

— 『大漢和』秋の季節をいう。

— 『国語大』なし。

— 『漢典』秋天的季候。

B 帝・神の名に係わるもの

(一) 五色く「青帝」・「蒼帝」(春)

「赤帝」(夏)

「白帝」(秋)

「黒帝」・「玄冥」・「玄帝」(冬)

「青帝」・「蒼帝」

— 『大漢和』「青帝」五天帝の一。東方に位す。春をつかさどる神。青皇。「蒼帝」東方を主宰する帝。春を掌る。

— 『国語大』「青帝」五天帝の一つ。東方をつかさどる神。また、春をつかさどる天帝。春の神。青皇。東帝。東君。転じて、春の異称。「蒼帝」なし。『大

辞泉』の「青帝」解説に「蒼帝」がある。

「赤帝」

— 『大漢和』 五天帝の一。南方の神。又、夏をつかさどる神。

— 『国語大』 五人の天帝の一人。南方をつかさどる神。

また、夏をつかさどる神。転じて、夏の異称。

「白帝」

— 『大漢和』 五天帝の一。五行では白に、季節では秋に当り、西方を掌る。秦は白帝を祠る。

— 『国語大』 五天帝の一つ。西方をつかさどる神。また、秋をつかさどる天帝。秋の神。転じて、秋の異称。

「黒帝」

— 『大漢和』 五天帝の一。北方の神。殷の湯王は黒帝に当る。

— 『国語大』 五天帝の一つ。天上にあつて北方をつかさどる神。転じて、冬の異称。

「亥冥」

— 『大漢和』 大陰の神。冬の神。北方の神。刑殺を主る。  
(「刑殺」罪にあててころす。死刑にする。)

— 『国語大』 刑殺をつかさどる、大陰、冬、北方の神。  
転じて、冬の異称。

「亥帝」

— 『大漢和』 天帝。

— 『国語大』 北方の神。また、冬の異称。

(二) 五方く「東帝」・「東君」(春)、「西顛」(秋)

「東帝」

— 『大漢和』 春の神。東皇。東君。

— 『国語大』 春の神。東君。青帝。

「東君」

— 『大漢和』 春の神。東皇。

— 『国語大』 春。また、春の神。

「西顛」

— 『大漢和』 ①西方を司る神。又、秋の大気をいう。②漢の郊祀歌の一。

— 『国語大』 なし。

「郊祀歌」は、前漢王朝の祭祀で用いられた「郊祀歌十章」で『漢書・礼楽志』に収録されている。『漢書』は後漢の班固著、前漢の歴史を紀伝体で記した書で、司馬遷の「史記」と共に中国の歴史書を代表する。

〔漢書、礼楽志〕西顛沈暘、秋氣肅殺、韋昭曰、「西方少昊也。」師古曰、「沈暘、白氣之貌也。」(文獻\*

14、「少昊」は次項の「少皞」参照)

「郊祀歌十九章」中の「鄒衍の音楽」(各季節を讚美する歌)は当時の中国の季節感を象徴するものとして興味深いので、ここに紹介して置く(文獻\*15)。先述のように、鄒衍は中国の戦国時代に五行説を唱えた人である。

青陽（春） 鄒衍の音楽

春ここに萌え初め 草の根はこぞり生い立ち  
甘雨滋雨ともに恵まれて 生きとし生けるものみな来りたり

おどろなる春の雷に 草木はみな花開き 穴籠る虫も  
這い出でてかしまり耳傾く  
落葉せる木々も芽ぶき 新しき命はぐくむ  
人和らぎ樂しめば みどり子や胎児に及び  
万物みな満されぬ これ春の大き祺せ

朱明（夏） 鄒衍の音楽

夏の気盛んになりて あまねくも万物に及び  
草木生い茂りきて つややかに伸びひろがる  
開く花敷きつらねられ豊かなる実を結ぶ すでに大き  
くすでに盛んなり  
神の田に実りし穀物は まいらせん百神の饗として  
大いなる祀りをなして 肅みとやわらぎを忘れねば  
神は嘉して祐けられ 子孫とこしえに限りなし

西颢（秋） 鄒衍の音楽

秋の気は真白に澄み 草木を枯らし果てけり  
五穀の穂たわわになりて いやつぎつぎに実りゆく  
姦偽さしもしもささず 祿孽も伏し息みぬ  
辺境の民は群れ来り 四方に住む夷も服す

すでにして我が威に畏れ ただ大徳を慕うのみ  
附順て驕ることなく 心正しくつつしむ

玄冥（冬） 鄒衍の音楽

冬の気は厳しく暗く 虫はひそみ隠れぬ  
草木は零落し 冬至りて霜は降り  
乱るるを治めては邪を払い 異様の俗を正す  
民草は本にかえり 飾りなき真心を抱く  
信と義をつくくして 五獄を望祭すれば  
神の田の收穫の砌 よき実りは全て得られん

(三) 「炎帝」・「祝融」(夏)

「少皞」・「蓐收」(秋)

「顓頊」・「冬帝」・「冬將軍」(冬)

「炎帝」

— 『大漢和』夏の神。

— 『国語大』夏をつかさどる神。また、その神としての  
太陽。

「祝融」

— 『大漢和』上古の人。顓頊の孫といい、或は子という。  
高辛氏（古の帝）の火正（五官の一。火星を祭り、  
火政を行うことを掌る。）。其の淳耀（大きく光り  
かがやく）惇大（あつく大きい）にして四海を光明

にするを以て祝融という。後世、火の神・夏の神・南海の神・南方の神等として祀られる。

— 『国語大』 中国で、火をつかさどる神。また、夏の神、南方の神。祝融氏。祝融神。

「少皞」

— 『大漢和』 「少皞」 上古の帝。少昊に同じ。「少昊」 上古の帝。金天氏。金徳を以て王となつたので、後世、秋を司る神とす。

— 『国語大』 「少皞・少昊」 中国における伝説上の帝王の名。黄帝の子。後世、秋をつかさどる神とされる。金天氏。

「蓐収」

— 『大漢和』 神の名。秋の神。天に在つて、刑罰を掌る。  
— 『国語大』 秋の神。天にあつて西方をおさめ刑罰をつかさどるといふ。

「顓頊」

— 『大漢和』 上古の帝王。黄帝の孫。高陽氏と号す。  
— 『国語大』 中国の伝説上の五帝の一人。黄帝の孫。高陽氏。

『華実年浪草』を参照し『四庫DB』で検索すると、『漢書・魏相丙吉伝』（文献\*16）に次の一節がある。

〔漢書、魏相丙吉伝〕 北方之神顓頊、乗坎執權司冬。

日本語訳「北方の神顓頊は、坎に乗り権を執つて冬を司る。」、訳注「坎の卦（易の八卦）は北であり、

冬であり、水であり、智であり、謀であり、重である。それゆえ、権（はかりのおもり、分銅）である。」

（文献\*17）。

「冬帝」

— 『大漢和』 なし。「黒帝」に次の用例がある。

〔故事成語考、歳時〕 水則旺於冬、其色黒、故冬帝曰黒帝。

— 『国語大』 冬の神。

「冬將軍」

— 『大漢和』 なし。

— 『国語大』（モスクワに攻め込んだナポレオンが嚴寒に悩まされて敗れた史実によつていう）冬の異称。

「冬將軍」は中国語文献・辞書にない。ネット検索によれば「冬將軍」は、この史実をイギリスの記者が「general frost」と表現したことに由来する。「general」は「將軍」、「frost」は「凍りつく寒気、特に氷点下の嚴寒」（『ランダムハウス英和大辞典』）である。

C 季節の特徴に係わるもの

(一) 「発生」（春）、「長嬴」（夏）、「收成」（秋）、

「安寧」（冬）

「発生」、「長嬴」、「收成」、「安寧」の出典は『爾雅』、



次の引用の括弧内は『爾雅注疏』による。

〔爾雅、釈天〕春為發生、夏為長嬴、秋為收成、冬為安寧。(此亦四時之別号。)(文獻\*8、9)

『大漢和』、『国語大』では、それぞれ次のように解説されている。

〔發生〕

― 『大漢和』 春をいう。

― 『国語大』 「發生」に『大漢和』と同義の語意なし。

〔長嬴〕

― 『大漢和』 夏の異称。成長繁茂する意。

― 『国語大』 なし。

〔收成〕

― 『大漢和』 秋をいう。成熟した穀物を収穫する意。後

世、秋に収穫することを、農家で秋成という。

― 『国語大』 秋のこと。また、穀物などをとり入れること。収穫。

〔安寧〕

― 『大漢和』 冬の別名。

― 『国語大』 冬の別名。

(二) 〔献節〕・〔芳春〕・〔陽春〕・〔春べ〕 (春)

〔献節〕

― 『大漢和』 なし。

― 『国語大』 なし。

『滑稽雑談』の「献節」用例を参照し『全唐詩DB』で検索すると、次の一節がある。

〔李世民、正日臨朝〕 條風開「献節」、灰律動「初陽」。

〔『全唐詩』 卷一、返り点は『滑稽雑談』による。)

〔李世民〕 唐の第二代皇帝、太宗。「正日」 正月一日。

〔條風〕 東北から吹いて来る春の風。「灰律」 先の

「素商」で述べた灰管に同じ。「初陽」 朝日。

〔芳春〕

― 『大漢和』 かんばしいはる。百花の咲き匂う春。春の

季節をいう。

― 『国語大』 花ざかりの春。春の美称。

〔陽春〕

― 『大漢和』 温暖な春の時節。

― 『国語大』 陽気の動き出す暖かな春。陽気の満ちた暖

かな時節。はる。

〔春べ〕 この表記で記載のあるのは古語辞典のみ。

― 『岩波古語辞典』 春のころ。

〔春方〕

― 『大漢和』 なし。

― 『国語大』 (古くは「はるへ」) 春の頃。春さき。春。

― 『漢典』 東方。媚葉。中国では、日本と同じ語意はな

いようである。

(三) 「炎夏」・「炎節」・「炎陽」・「夏場」・「蒸炊」  
「農節」(夏)

「炎夏」

― 『大漢和』 あついで夏。真夏。又、あつさ。

― 『国語大』 暑い夏。真夏。

「炎節」

― 『大漢和』 夏の季節。

― 『国語大』 四季のうち最も暑い季節、すなわち、夏。

「炎陽」

― 『大漢和』 夏の時候。夏日熱気の盛なこと。

― 『国語大』 夏の日光。夏の太陽。また、太陽の照りつ

ける夏の時候。

「夏場」

― 『大漢和』 なし。

― 『国語大』 夏のころ。夏の間。夏季。冬場に対してい

う。

「蒸炊」

― 『大漢和』 むして飯をたく。むしかしぐ。蒸暑いこと

の喩。

― 『国語大』 なし。

「農節」

― 『大漢和』 農作の時期。

― 『国語大』 春の終わりから秋の初めにかけての、農作  
上で一番大切な時期。稲を植え、それを刈り取る間  
の期間。

(四) 「高秋」・「凜秋」・「爽節」

「朗景」・「明景」(秋)

「高秋」

― 『大漢和』 空が高く晴れわたる秋。

― 『国語大』 晴れ渡つて空の高く見える秋。秋たけなわ  
の季節。

「凜秋」

― 『大漢和』 きびしい秋の季節。秋の気は肅殺である  
からいう。(「肅殺」秋気が草木をそこない、枯ら  
すこと。)

― 『国語大』 なし。

「爽節」

― 『大漢和』 秋をいう。

― 『国語大』 さわやかな季節。秋の異称。

「朗景」・「明景」

― 『大漢和』 「朗景」なし。「明景」なし。

― 『国語大』 「朗景」ほがらかな情景。明るいながめ。

「明景」 秋の異称。

『華実年浪草』の「明景」に「元帝纂要曰秋景曰朗景朗

明義同」とある。「朗明義同」は同歳時記による解説の部分で、「秋景曰朗景」は『梁元帝纂要』の一節である。

原典の『梁元帝纂要』は参照出来なかったが、『初学記』に次の一節がある（文献※18）。

〔初学記、歳時部〕梁元帝《纂要》曰、秋曰白蔵。景曰朗景、澄景、清景。

また、『俳諧歳時記』（曲亭馬琴編）の「明景」に「詔勅鶴唳賦」とある。「鶴唳」は鶴の鳴き声である。「詔勅鶴唳賦」に符合する文献名や文節は見当たらないが、『全唐詩DB』で検索すると、次の一節がある。

〔司馬扎、送進士苗縦帰紫邏山居〕鶴声夜無人、空月随松影。今朝抛我去、春物傷明景。〔『全唐詩』卷五九六）

「進士」科挙の合格者。「紫邏」河南省伊陽県の東にある山名。「春物」春の景物。春の万物。

(五) 「厳冬」・「律檀」・「冬場」(冬)

「厳冬」

— 『大漢和』寒さの烈しい冬。まふゆ。

— 『国語大』寒さの厳しい冬。冬の寒さの特に厳しいころ。

「律檀」

— 『大漢和』なし。

— 『国語大』冬の異称。出典は『増山井』。

『増山井』に記載の『文選』を『漢籍DB』で検索したが、『文選』に「律檀」の語は見当たらない。

また、『華実年浪草』の詳細な考証解説に基づいた『増補俳諧歳時記栞草』（岩波文庫）の「律檀」考証には、「律」や「檀」の語はあっても「律檀」の語はなく、解説は「按ずるに、律檀は檀木の火を取て、律を改むるの義にや。」と疑問符のままに終わっている。

「冬場」

— 『大漢和』なし。

— 『国語大』冬の季節のころ。冬のあいだ。冬向き。夏場に対していう。

中国語辞書・文献になく、「夏場」と同じく和製漢語のようである。

D 季節の期間に係わるもの

(一) 「三春」・「三夏」・「三秋」・「三冬」

「三春」

— 『大漢和』春、三箇月の称。孟春・仲春・季春。

— 『国語大』春の三か月。陰暦の孟春（正月）、仲春（二月）、季春（三月）をいう。

「三夏」、「三秋」、「三冬」も「三春」に準ずる。



秋の「旻天」解説が『爾雅注疏』、『釈名』で異なるのは、秋という季節の両面を言い得て興味深い。

— 『大漢和』「蒼天」春の空。「昊天」夏の空。「旻天」秋のそら。「上天」冬の天。

— 『国語大』「蒼天」特に、春の空をいう。「昊天」四天の一つ。夏のそら。「旻天」秋のそら。秋の天。「上天」四季の天の一つ。冬の天。

(二) 「爽籟」(秋) ↓天文

「爽籟」

— 『大漢和』清風。

— 『国語大』秋風のさわやかなひびき。

『図説俳句大歳時記』では、「爽籟」が『増山井』などで「秋」の傍題となっていることなどを考慮してか、時候、天文の部の両方に掲載されている。

一方、『角川俳句大歳時記』を含め、最近の歳時記では天文の部に掲載されていることが多い。語意からすれば、天文の部が妥当である。

B 他の季節に移すべきもの

(一) 「発春」(春) ↓初春

「発春」

— 『大漢和』春のはじめの月。孟春。

— 『国語大』春のはじめ。初春の月。孟春。

(二) 「瓜時」(夏) ↓初秋

「瓜時」

— 『大漢和』瓜の熟する時。陰曆、七月。

— 『国語大』瓜の熟する時節。陰曆七月の称。

C 誤記と思われるもの

(一) 「蒸炒」(夏) ↓「蒸炊」

「蒸炒」が「蒸炊」の誤記であることは「三十分と三年」(『新歳時記通信』第四号)で詳述した。

(二) 「西侯」(秋) ↓「西候」

「西候」

— 『大漢和』、『国語大』とも掲載なし。

— 『漢典』、『百度百科』とも未収録詞。

出典は『滑稽雑談』で「西侯」の項に「杜詩」とだけ記

載がある。しかし、『全唐詩DB』、『杜甫詩全集』（文献\*20）を検索しても「西侯」の語はない。また、他の主な近世歳時記に「西侯」の掲載はない。

一方、『大漢和』に「西侯」の掲載があり、用例に「杜詩」がある。「西侯」は「西候」の誤記と思われる。

「西候」

— 『大漢和』秋の季節をいう。

（王勃、秋日別王長史）正悲西候日、更動北梁篇。

（『全唐詩』卷五六）

（杜甫、秋日荆南送石首薛明府）南征為客久、西候

別君初。（『全唐詩』卷二二二）

— 『国語大』なし。

— 『漢典』①秋天的季候。（王勃、秋日別王長史）正悲

西候日、更動北梁篇。②西辺の亭站（西のはてに立つ亭）。旧時送別之处。（杜甫、秋日送石首薛明

府）南征為客久、西候別君初。仇兆鰲注（『杜

詩詳註』）候、亭也。

このように、『漢典』は『大漢和』の用例のうち、王勃の詩を『大漢和』と同じ語意①の用例に、杜甫の詩を『大漢和』に記載のない語意②の用例に挙げています。

杜甫の詩は、日本の文献（\*21）、中国の文献（\*7）など『漢典』と同様の評釈であり、「秋の季節」をいう

「西候」の用例は、王勃の詩が間違いのない所である。

（三）「西皎」（秋）↓「西顥」

「西皎」

— 『大漢和』、『国語大』とも掲載なし。

— 中国語文献・辞書とも掲載なし。

— 出典は『滑稽雑談』で、「西皎」の項に「郊祀志」とだけ記載がある。

しかし、『漢書・郊祀志』（文献\*22）を検索しても「西皎」の語は見当たらない。また、他の主な近世歳時記に「西皎」の掲載はない。

一方、『漢書・礼楽志』（文献\*14）に「郊祀歌十九章」があり、その中に「西顥沆瑒、秋氣肅殺」の一節がある。「西皎」は「西顥」の誤記と思われる。

D 文献の見当たらないもの

（一）「商顥」（秋）↓抹消

「商顥」

— 『大漢和』、『国語大』とも掲載なし。

— 中国語文献・辞書とも掲載なし。

— 出典は『滑稽雑談』であるが、「秋異名」の中に「商顥」と記載があるだけで、解説はない。また、他の主な近世歳時記に「商顥」の掲載はない。

参考文献（歳時記は「主要歳時記一覧」参照）

- \* 1 『大漢和辞典・縮写版』諸橋轍次著、一九七六年、大修館書店
- \* 2 『日本国語大辞典・第二版』二〇〇〇年、小学館
- \* 3 「知識検索サイト ジャパンナレッジ」
- \* 4 『暦と時の事典』内田正男著、一九八六年、雄山閣
- \* 5 『現代こよみ読み解き事典』岡田芳朗・阿久根末忠編著、二〇〇六年、柏書房
- \* 6 『現代語訳・黄帝内経素問・下巻』石田秀実監訳、一九九三年、東洋学術出版社
- \* 7 『詳註全唐詩』林徳保・李俊・倪文杰編、全四卷、一九九八年、大連出版社
- \* 8 『四庫DB』―「四庫全書―経部―十三経類―爾雅―釈天第八」
- \* 9 『四庫DB』―「四庫全書―経部―小学類―爾雅注疏―爾雅注疏卷六」
- \* 10 『王子安集』王勃撰、乾隆御覧本・四庫全書薈要・集部第二冊、一九九七年、吉林人民出版社
- \* 11 『李白全詩集・第二卷』久保天随訳注、統国訳漢文大成、一九八九年、日本図書センター
- \* 12 『白楽天全詩集・第三卷』佐久節訳注、統国訳漢文大成、一九八九年、日本図書センター

- \* 13 『礼記・上』竹内照夫著、新釈漢文大系27、一九七一年、明治書院
- \* 14 『四庫DB』―「四庫全書―史部―正史類―漢書―卷二十二・礼楽志」
- \* 15 『漢書郊祀志』班固著、狩野直禎・西脇常記訳注、一九九六年、平凡社（東洋文庫）
- \* 16 『四庫DB』―「四庫全書―史部―正史類―漢書―卷七十四・魏相丙吉伝」
- \* 17 『帝記表志』班固撰、小竹武夫訳、漢書・上巻、一九七七年、筑摩書房
- \* 18 ネットサイト『読書網』―「古籍・国学―子部―類書類―初学記―本地閲読―卷三・歳時部」
- \* 19 『四庫DB』―「四庫全書―経部―小学類―積名」
- \* 20 『四庫DB』―「伝統文学現成書目―詩詞類書籍―杜甫詩全集」
- \* 21 『杜甫全詩集・第四巻』鈴木虎雄訳注、統国訳漢文大成、一九八九年、日本図書センター
- \* 22 『四庫DB』―「四庫全書―史部―正史類―漢書―卷二十五上下・郊祀志」

## 春夏秋冬の傍題（例句編）

### 一 はじめに

『角川俳句大歳時記』の「春夏秋冬」の例句数は「春」八〇句、「夏」四五句、「秋」七七句、「冬」一〇〇句、計三〇二句である。

そのうち「春夏秋冬」傍題の例句数は「春」〇句、「夏」一一句、「秋」三句、「冬」一六句、計三〇句と約一割であり、傍題の数の割には、例句の掲出は少ない。

一方、「春の何々」などと、季節名に何でも言葉をつけて安易に季節とすべきでないと言われたりするが、そうした季節名に言葉をつけただけの季節の例句が、ざっと数えただけでも全体の半数近くある。

また、『図説俳句大歳時記』は例句を季節・傍題別に分類して挙げているが、「春」、「夏」、「秋」、「冬」の例句欄を参照すると、次のような傍題が立項されている。

「烈しき夏」、「錦秋」、「秋の翳」  
「春の岬」、「春の峡」、「冬の谷」  
「春の町」、「春の道」、「春の駅」、「春の城」

「春の寺」、「秋の寺」

「春の人」、「京の春」、「春の宿」、「冬の宿」

「春の旅」、「秋の旅」、「冬の旅」、「冬の航」

「春の動物」（「春の雛」、「春の魚」、「鴉の春」）

「冬の動物」（「冬の魚」、「冬越す蚊」、「冬の馬」）

「春の森」、「春の林」

「春の植物」（「春のにんじん」）

「冬の植物」（「冬の松」、「冬のメロン」、「冬の樫」）

そして、虚子編『新歳時記』は「簡単にして要を得るといふ信条の下に博物的な叙述を避け事実在即し句作上必要なことに止めた。」（「序」）との解説方針に基づき、解説中にゴシック体で掲げる傍題等として、次のものを実際に立項している。

「春の町」、「冬の町」、「村の春」、「野路の秋」

「島の春」、「島の夏」、「島の秋」、「冬の浜」

「冬沼」

「春の寺」、「夏の寺」、「春の宮」、「夏の宮」

「春の人」、「秋の人」、「秋の宿」、「冬の宿」

「春の旅」、「京の春」

「春の園」、「窓の秋」、「冬の庭」

「ホ句の秋」

これらの季節は私が模索している「季節の軸ではない物象の軸を第一義とする新しい歳時記」の取っ掛かりの一つともなるものである。



以下、『角川俳句大歳時記』の「春夏秋冬」の傍題と、  
例句中に見られる「春の何々」、「何々の春」などの季題、  
及びその例句について、各部に分けて、それぞれ簡単な考  
察を行う。

## 二 時候

(一) 「朱夏」、「赤帝」、「炎帝」(夏)

「金秋」、「白帝」、「爽節」(秋)

「玄冬」、「冬帝」、「冬將軍」、「三冬」(冬)

「春夏秋冬」の傍題で例句の掲載があるのは右掲のもの  
のみである。その中で「炎帝」、「冬帝」は八句と例句が  
多く、「冬將軍」が三句、関連語「冬の王」の例句が一句  
ある。夏、冬という敵しい季節と帝、將軍という強大な権  
力との組合せに関心度が高いことが分かる。

その他の傍題は「玄冬」四句、「朱夏」二句、あとは全  
て一句である。例句が少ない、無いから傍題として掲載す  
べきでないということではないが、精々解説文中に載せる  
だけで良いような語も多くあり、それなりの取捨選択は必  
要であると思われる。

(二) 「春の七曜」、「刻々の春」、「世の夏」、「日々の冬」

これらは他の季節名を付けても、「七曜」は日曜から土  
曜まで、それぞれに使える。

麗しき春の七曜またはじまる	山口	誓子
山毛櫲林刻々の春ありにけり	稲畑	汀子
世の夏や湖水に浮かむ波の上	芭蕉	
温めるも冷ますも息や日々の冬	岡本	眸

(三) 「夏真昼」、「冬の昼」、「春の午後」

『角川俳句大歳時記』で「春<sup>しゅん</sup>昼」、「夏の昼」、「夏真  
昼」、「秋の昼」、「秋真昼」は季題である。「春昼」解説に  
「夏の昼や冬の昼という季語はない。」とあるが、どちら  
も季題あるいは例句の掲載がある。

夏真昼死は半眼に人を見る	飯田	蛇笏
--------------	----	----

五百羅漢の笑顔恐ろし冬の昼	大高	芭溜子
---------------	----	-----

また、「午前」は「朝」と感覚が重なるが、「午後」は  
「昼」とは少し違うものがある。「春の午後」だけでなく、  
秋など、他の季節の午後も使えそうである。

娼婦等は首から老ゆる春の午後	対馬	康子
----------------	----	----

## 三 天文

(一) 「春の声」、「春の鼓動」、「冬のこえ」、「冬の音」

天文の季題に「秋の声」(傍題に「秋の音」)がある。

青海や太鼓ゆるまる春の声 素 堂

脈さぐる遠くに春の鼓動あり 坪井 耿青

叩きたる石の中より冬のこゑ 鈴木 公二

(二)「春の景」、「春の詠め」、「夏景色」、「夏の色」

「夏の匂い」、「冬の匂い」

天文の季題に「春光」(傍題に「春の色」・「春望」・「春の匂」・「春景色」)、「秋の色」(傍題に「秋光」・「秋景色」・「秋望」)がある。

また、地理の季題に「冬景色」(傍題に「冬の色」)がある。同系列の季題、例句が時候、天文、地理に分かれ、光、色、景色、匂いに係わる季題が未整理のままに立項されている。

夏の色なり宝塚大劇場 山尾 玉藻

駆けだしてゆきし子夏の匂ひかな 黒川 悦子

風吹けば冬の匂ひと子が言へり 大塚 省子

(三)「秋の闇」、「冬の闇」、「冬の影」

天文の季題に「春の闇」、「夏闇」(「五月闇」傍題)、「春陰」、「秋陰」(「秋曇」傍題)がある。

漁火や胸先ひたす秋の闇 徳田千鶴子

太白の輝きそめし冬の闇 稲畑 汀子  
冬の影二人の吾の間答す 角川 源義

(四)「春落日」、「夏の天の川」

天文の季題に「春の入り日」(「春の日」傍題)、「秋の入り日」(「秋の日」傍題)、「冬日没る」・「冬落暉」(「冬日」傍題)、「天の川」(秋)、「冬銀河」がある。

春落日しかし日暮れを急がない 金子 兜太  
こころよき夕べぞ夏の天の川 関 更

#### 四 地理

(一)「春の国」、「山中の春」、「山国の春」、「夏の山国」、「山国の秋」、「峡の秋」、「峡の冬」

行かぬ道あまりに多し春の国 三橋 敏雄  
夏の山国母いてわれを与太と言う 金子 兜太  
水が水押して逆巻く峡の秋 山崎千枝子

(二)「春の町」、「春の街」、「冬の里」、「冬の村」

春の町他郷のごとしわが病めば 相馬 遷子

ひと死ねり旗にぎやかな春の街  
日の暮は灯をともしのみ冬の村

片山 桃史  
伊藤 政美

(三) 「春の道」、「大路おおじの春」、「春の大道だいでう」、「辻の春」  
「冬の坂」、「路地の冬」

業お卒おえて無帽なり春の大道に  
中年や独語おどろく冬の坂  
うしろ手に戸を閉めて出る路地の冬

伊丹三樹彦  
西東 三鬼  
今井 誠人

(四) 「春の駅頭」、「冬の駅」、「コインロッカーの冬」

春の駅頭鰐淵氏蟻塚氏  
サーカスの虎降ろさるる冬の駅  
塩を吹きそうなコインロッカーの冬

今井 聖  
井上 弘美  
五島 高資

(五) 「春の城」、「城の秋」、「冬の美術館」

掌上の珠のごとくに春の城  
音もなく歩くお方や城の秋  
どの壁も目となる冬の美術館

富安 風生  
岸本 尚毅  
岸原 清行

(六) 「春の寺」、「堂の秋」、「寺の秋」、「秋の寺」

「鐘の秋」、「冬の鐘」

春の寺最後晚餐の図に見ゆ  
彼の女今日も来て泣く堂の秋  
冬の鐘おんおん長き病ひかな

山口 青邨  
河野 静雲  
長谷川久々子

(七) 「春仏」、「春の野辺送り」、「春の古墳」、「春の墓」

春仏石棺の朱に枕しぬ  
縮んだり伸びたり春の野辺送り  
からつぼの春の古墳の二人かな

飯田 蛇笏  
黛 執  
夏井いつき

(八) 「大草原の秋」、「採石場の秋」、「冬の畦」

「冬の土手」

月と旅日と旅大草原の秋  
最澄の瞑目つづく冬の畦  
冬の土手カナリア色の電車来る

鷹羽 狩行  
宇佐美魚目  
久保田富子

(九) 「春の水面」、「春の水輪みずわ」、「春の波間」

「春の岬」、「冬の湾」、「冬灯台」

猫の舌春の水面の輪をひろぐ  
根まで見ゆ春の岬のほんだはら  
日時計は銅の塊り冬の湾

後藤 春翠  
原田 喬  
今井 聖

(十) 「浜の秋」、「浦の秋」、「磯の秋」

「春の砂丘」、「砂丘冬」

寂しさや須磨に勝ちたる浜の秋

夜あるきから櫓の音や浦の秋

砂丘冬火へ流木を曳きしあと

芭蕉

去来

大岳水一路

(十一) 「春の地震」

東日本大震災は「春の地震」、関東大震災は「秋の地震」、阪神淡路大震災は「冬の地震」である。「夏の地震」には一九四八年（昭和二三）六月の福井地震などがある。日本は春夏秋冬、どの季節にも大地震が起こる。

今死にし母をゆすりて春の地震

比類なく優しく生きて春の地震

岸田 稚魚

攝津 幸彦

(十二) 「甲斐の春」、「余呉の春」、「佐久の春」

「夏の神田」、「須磨の秋」、「木曾の秋」

「むさし野の秋」、「秋の浅間」、「宇治の冬」

地名に季節を付けて季節としたものは沢山ある。どんどん作ってみれば良い。

孤独かと問はる湯治の甲斐の春

及川 貞

鯉こくも鯉の筒煮も佐久の春

子猫見し夏の神田はやさしかり

送られつ送りつ果ては木曾の秋

描きあげて秋の浅間を持ち帰る

何といふ淋しきところ宇治の冬

岩上とし子

大井 雅人

芭蕉

内川 伝夫

星野 立子

(十三) 「夏の巴里」、「羅馬の秋」

これは外国の地名である。海外旅行、海外在住が盛んな今の時代、探せば例句は幾らでも出て来るであろう。

描きて赤き夏の巴里をかなしめる

星はみな女性名詞や羅馬の秋

石田 波郷

マブソン青眼

### 五 生活

(一) 「春の家」、「春の宿」

「秋の小庭」、「秋の厨」

「冬の宿」、「冬山家」、「越冬小屋」、「冬の納屋」

生活の季節に「夏館」（傍題に「夏邸」・「夏の宿」）、「秋の宿」（傍題に「秋の家」・「秋の庵」・「秋の戸」）、「冬館」がある。

折釘に烏帽子かけたり春の宿

午後の日や内くらくして春の家

蕪 村

鈴木六林男

病間あり秋の小庭の記を作る  
病みて聴く秋の厨のもの音を  
さびしいぞ越冬小屋のマヨネーズ

正岡 子規  
三橋 鷹女  
須佐 薫子

(二) 「春の壺」、「夏のうす刃」、「秋の風鈴」

「冬鏡」、「冬の礎」

「風鈴」は夏、「礎」は秋の季節である。

水注して音のこもれる春の壺  
龍すつぽんをくびきる夏のうす刃かな  
少しづつ花嫁になる冬鏡

山上樹実雄  
飯田 蛇笏  
福嶋 延子

(三) 「春の人」、「喜寿の春」、「冬の家族」

「秋の人」、「秋の顔」、「秋のからだ」

先ゆくも帰るも我もはるの人  
ここへ来て佇てば誰しも秋の人  
しとしては水足す秋のからだかな

白 雄  
後藤比奈夫  
矢島 渚男

(四) 「春を病む」、「夏病みこもる」

春を病み松の根つ子も見あきたり  
かなしさよ夏病みこもる髪ながし

西東 三鬼  
石橋 秀野

(五) 「春の遊び」、「秋の酒」、「秋のコップ酒」

「冬走者」

老人を起して春の遊びせむ  
もし生まれ変らば秋のコップ酒  
勝つための拳にあらず冬走者

仁平 勝  
岡本 眸  
能村 研三

(六) 「春の喇叭」、「三線の夏」、「真冬の琴」

人妻に春の喇叭が遠く鳴る  
琴のはる三線の夏となりけらし  
男らや真冬の琴をかき鳴らし

中村 苑子  
大江 丸  
飯島 晴子

(七) 「春の旅」、「夏の旅」、「秋の旅」、「冬旅」

春の旅はげしき海に会いひけり  
そこつなる雲こそ出づれ夏の旅  
秋旅や胸の火種の失せぬ間に  
冬旅の前はおほきな湖水かな

阿部みどり女  
路 通  
櫛田 栄子  
北 枝

(八) 「春の航」、「春の舟」、「秋の航」、「秋の終列車」、

「冬の貨車」

春の航わが紅唇を怖ちにけり  
ヴィクトリア駅より秋の終列車

飯島 晴子  
友田喜美子

六 動物

(一)「驢馬の夏」、「秋の馬」、「冬の馬」、「冬の牛」

馬の季題は春の「種馬」(「猷交む」傍題)、晩春の「春駒」(傍題に「春の馬」・「若駒」)、「馬の仔」(傍題に「馬の子生る」・「孕馬」)、秋の「馬肥ゆ」(傍題に「秋の駒」と沢山ある。

また、牛の季題は春の「種牛」(「猷交む」傍題)がある。

身を覆ふほどに荷を負ひ驢馬の夏 佐藤 博美

秋の馬われの無言を過ぎゆきぬ 金子 兜太

冬の馬美貌くまなく睡りをり 石川 雷児

子を産みしくびれが角に冬の牛 市村究一郎

(二)「秋の猫」、「冬のゴリラ」

猫の季題は初春の「猫の恋」(傍題に「春の猫」など多数)、晩春の「猫の子」(傍題に「親猫」・「孕猫」など)、冬の「竈猫」(傍題に「炬燵猫」など)がある。

胴伸びるときは無想や秋の猫 橋 間石

ベビーカー冬のゴリラを素通りす 佐野 光子

(三)「秋の鳥」、「秋の鯉」、「冬の水母」

鳥の季題に「春の鳥」(傍題に「春禽」)、晩秋の「秋小鳥」(「色鳥」傍題)、「冬の鳥」(傍題に「寒禽」・「かじけ鳥」)がある。

鯉の季題は夏の「緋鯉」(傍題に「斑鯉」・「錦鯉」)、晩冬の「寒鯉」(傍題に「凍鯉」など)がある。

また、「水母」は夏の季題である。

驚けば秋の鳥なる鳥骨鶏 加藤 楸邨

ひるがへる遊戯を尽す秋の鯉 斎藤 玄

悲しくて冬の水母に杖をやる 山口 誓子

七 植物

(一)「春の森」、「春の樹」、「冬の森」

切株にランチボックス春の森 山崎ひさを

斧嚙ませたるまま春の樹となりぬ 大石 悦子

冬の森旧知のごとく泉噴く 相馬 遷子

(二)「柿の秋」、「冬の松」、「冬の松籟」、「椎檜の冬」、「冬の竹」、「冬のにんじん」

「柿の秋」とは季重なりの語のようであるが、晩秋の季題「柿」の傍題に「柿の秋」がある。また、『図説俳句大歳時記』には傍題としての記載はないが、「柿」の例句欄に「柿の秋」が立項され、次の蛇笏、爽雨の二句が掲載されている。

吊鐘のなかの月日も柿の秋 飯田 龍太  
農となつて郷国ひろし柿の秋 飯田 蛇笏

柿秋や懇望されて十四嫁 皆吉 爽雨

松の季題は晩春の「若緑」、「松の花」、初夏の「松落葉」、晩秋の「色変へぬ松」、「新松子」と各季節にあるが、「冬の松」も詠む。

川音やあらしをながす冬の松 野 坡  
赤き幹冬の松籟捧げ立つ 中村草田男

椎の季題は初夏の「椎若葉」、「椎落葉」、仲夏の「椎の花」、晩秋の「椎の実」、榿は晩春の「榿の花」、初夏の「榿若葉」、「榿茂る」、「榿落葉」、晩秋の「榿の実」があるが、「椎榿の冬」も詠む。

父母や椎榿の冬チカチカす 森 澄雄

竹の季題は晩春の「竹の秋」、初夏の「竹の落葉」、「竹の皮脱ぐ」、仲夏の「竹の花」、「若竹」、仲秋の「竹の春」、晩秋の「竹の実」があるが、「冬の竹」も詠む。

段丘の断崖のその冬の竹 石塚 友二

人參は細長い東洋系（紅色の金時人參）、太く短い西洋系（オレンジ色の五寸人參）の二品種に大別され、かつて

は東洋系が主流であったが、栽培の難しさなどから現在は西洋系が主流となっている。夏どりと冬どりがあがるが、冬どりの方が栽培し易いという。「人參」が冬の季題とされる所以である。

ロシヤ映画みてきて冬のにんじん太し 古沢 太穂  
この句は敢えて「冬のにんじん」と季重なりで詠むことにより、厳しいシベリアの大地に生きる人々の生活を観た感動を人參の鮮やかな色と太さに重ね合わせている。

映画はソ連二本目のカラー映画「シベリア物語」である  
とされ、日本では一九四八年（昭和二三）に公開されている。スターリン時代の映画だけに毀誉褒貶、様々の評価があり、映画好きとしては一度は観てみたい作品である。

なお、古沢太穂には次の句もあり、人參がお気に入り  
ようである。

ぬれ色の春のにんじん同志の店 古沢 太穂

八 おわりに

以上、季節名に言葉を付けただけの季題の世界が意外に  
広く豊かで奥が深いことが分かった。

本稿では『角川俳句大歳時記』だけで、他の歳時記の例  
句は省略したが、今後、物象軸を第一義とする歳時記の考  
察を進める中で、それらの例句も順次参照して行くことと  
する。

## 後記

昨年十一月、思い掛けず初句集を出すことになり、大勢の方から実にありがたい御感想を賜り、昨年一杯はその余韻に浸っております。

皆様の御蔭で、今まで持っていた自分の俳句に対するコンプレックスのようなものが少しは取れ、また、今後の道筋が少し見えて来た気がするのが何よりのことでした。

今号はようやく歳時記の本丸に迫り着き、時候部の季題を一年掛けて考察するつもりでしたが、気が付いたら春夏秋冬、四つの季題だけで六十ページを超しており、この辺で一旦区切りを付けることにしました。

今年は正月に剣菱の徳利の転倒を阻止しようとして早速にぎっくり腰になりましたが、その後は月に数回の里山歩きで体調は万全、例年のダニの来襲も、ラベンダーの切枝を部屋にぶら下げるだけでダニのダの字も聞かなくなり、実家に長期帰省中も、昨秋買ったミニノートの御蔭で中断することなく筆を進めることが出来ました。

日本版二十四節気のことなどは、今秋に結果が出てからコメントをした方が楽で、要らぬ恥も掻かないで済むのですが、放っておけない性分で先に書いてしまいました。

今回、多数の漢語を調べることになり、伝家の宝刀と思われた『大漢和辞典』にも誤植や疑義があり、未掲載の漢語が沢山あることを発見したのは驚きでした。

また、ネット上にキーワード検索が可能な膨大で信頼性の高い中国語文献のサイトが多数あることを知ったのも収穫の一つでした。

時候部の季題は全体の五%、それで一年掛ければ、単純計算で全部を終えるのに二十年掛かることになりました。

その間に俳句の世界もどんどん変わって行くのでしようが、その時々に合わせてながら、季題や歳時記に私なりの駄弁を弄して行くのも一興と思っております。

今後ともどうぞよろしく御願い申し上げます。

「新歳時記通信」第六号

発行日 二〇一二年六月十五日

編集発行 前田霧人

発行所

電話

メール

表紙写真 <http://hubblestie.org/>

「新歳時記通信」ホームページ

<http://mae.moo.jp/key/>

印刷製本 株式会社セイエイ印刷